

Title	メキシコ・チアパス高地のトウモロコシに関する文化人類学的考察
Sub Title	Anthropological study on maize in the Chiapas Highlands in Mexico
Author	松浦, 晴実(Matsuura, Harumi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.77 (2014.) ,p.93- 125
JaLC DOI	
Abstract	<p>Maize has always held great importance in Mexico, not only for people living in the present but also historically for those who lived in the same territory. Maize is an essential food source and instilled with religious meaning. Thus, it is deeply rooted in the daily lives of Mexicans, earning the territory the name "The Maize Country: Mexico." On the other hand, modernization has brought about significant changes with regard to maize. During the green revolution, the agricultural technology was introduced to achieve the progress of productivity; and the conclusion of NAFTA brought the market economy to the conventional maize cultivation.</p> <p>This study focuses on the community, illustrating the importance and how the value of maize has changed for the producers. During the fieldwork in the Chiapas Highlands, there was a change in how people perceived the value of maize. They had reevaluated their maize from something ordinary to something "precious" and "to be protected", and rediscovered it as "Our Maize." This movement has been analyzed based on Giddens' "modernization" to demonstrate the process of recreation and reconstruction of "Our Maize" and further explored the "Our Maize Culture" which is associated with maize cultivation.</p>
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000077-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メキシコ・チアパス高地のトウモロコシに関する文化人類学的考察
Anthropological study on maize in the Chiapas Highlands in Mexico

松 浦 晴 実*
Harumi Matsuura

Maize has always held great importance in Mexico, not only for people living in the present but also historically for those who lived in the same territory. Maize is an essential food source and instilled with religious meaning. Thus, it is deeply rooted in the daily lives of Mexicans, earning the territory the name “The Maize Country: Mexico.” On the other hand, modernization has brought about significant changes with regard to maize. During the green revolution, the agricultural technology was introduced to achieve the progress of productivity; and the conclusion of NAFTA brought the market economy to the conventional maize cultivation.

This study focuses on the community, illustrating the importance and how the value of maize has changed for the producers. During the fieldwork in the Chiapas Highlands, there was a change in how people perceived the value of maize. They had reevaluated their maize from something ordinary to something “precious” and “to be protected”, and rediscovered it as “Our Maize.” This movement has been analyzed based on Giddens’ “modernization” to demonstrate the process of recreation and reconstruction of “Our Maize” and further explored the “Our Maize Culture” which is associated with maize cultivation.

Key words: maize, modernization, reevaluation and rediscovery, tradition, globalization

キーワード: トウモロコシ, 近代化, 再評価と再発見, 伝統, グローカリゼーション

1. はじめに

トウモロコシが現在のメキシコの人びとの主食であることはよく知られている。メキシコ料理として日本でも馴染み深いトルティージャ¹⁾や、肉や野菜を包んで食べるタコス²⁾は、すべてトウモロコシが原料となっている。また、近年の研究により、トウモロコシの原産地がメキシコであったことが解明されており²⁾、トウモロコシは、現在メキシコに暮らす人びとにとってだけでなく、その地に栄えたさま

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了

ざまな文明・王国にとっても欠かすことのできない重要な食料源であったことが明らかにされている。また、絵文書や古代の遺跡に残る図像の研究から、トウモロコシは時に神格化され宗教的意味をも付与された作物であったことが指摘されている。こうしてトウモロコシはメキシコ文化の象徴とみなされ、「トウモロコシの国 (el país del maíz)・メキシコ」とまで称される。

しかし、その一方で、トウモロコシは国家の政策の局面で、その意味を問われ続けているともいえる。近代化の過程³⁾では、メキシコの経済および国民を支える食糧としてその生産性の向上を求められ⁴⁾、北米自由貿易協定 (NAFTA: North America Free Agreement)⁵⁾の締結以降は、国家によって管理・保護されていたトウモロコシ農業が、アメリカ・カナダとの国際共同市場における競争にさらされることとなった。NAFTA締結後の状況について、谷 (2010) は、トウモロコシが、政治的・社会的に重要な「特別」な作物であり続けながらも、政府当局や一部の生産者の間で「経済財」としてみなされ始めたこと、その変化を指摘している [谷 2010: 40]。

それでは、メキシコ国内で実際にトウモロコシ農耕を営んでいる人びとにとってのトウモロコシの位置づけや価値はどのように変化してきたのだろうか。

農家の人びとは、Petrich (1998) が指摘するように、トウモロコシ農耕に全て (健全な大地、自らの活動の大部分) を捧げてきた。トウモロコシ農耕は、男女で分業がなされており、男性は畑 (ミルパ)⁶⁾での農作業、女性はトウモロコシの調理という役割を担っており [Petrich 1998: 9]、日々の生活サイクルと農耕サイクルの緊密な一致についてはほかの多くの研究も指摘している。トウモロコシの農事暦に対応するかたちで多くの農耕儀礼も執り行われたという。

筆者は、地域社会に暮らす人びとのトウモロコシの位置づけや関係性の変化を明らかにするために、メキシコのチアパス高地⁷⁾に2012年5-6月・6-7月・2013年6-7月にそれぞれ1か月間、計3か月間滞在し、フィールドワークをおこなった。現地では、トウモロコシの価値の揺れ動きともいべき変化を観察した。農耕儀礼の衰退によってトウモロコシの宗教的価値の縮小が見られる一方、自分のミルパでとれたトウモロコシへの変わらない愛着、さらには、これまで当たり前食べていた自分たちのトウモロコシを再発見していく動きをとらえた。本稿では、こうしたトウモロコシにまつわる変化を、ギデンズ (1993, 1997) のいう「近代化」の概念を用いてとらえ直すことで、現地の人びとが“トウモロコシ”という目に見えるものを通して、“自分たちのトウモロコシ”“トウモロコシにまつわる自文化”を再評価・再構築していく諸相を考察した。

2. トウモロコシを取り巻く背景

2.1 人とトウモロコシ

トウモロコシは、コメ・コムギと並ぶ世界三大穀物のひとつとして世界の食糧事情を支えるとともに、メキシコでは、国の主要作物として人びとの生活と密接不可分な存在となっている。その理由として、食料源として栽培するうえで利点となる性質を数多く有しているが、重要な特性としては、①植物の成長に不可欠である太陽エネルギーの効率的利用を可能にする構造、②収穫率 (一粒の種子をまいて何粒の実が収穫できるかという比率) の高さ、③さまざまな気候条件への適応力⁸⁾が指摘されている [酒井 2011: 210-211]。

しかし一方で、トウモロコシは自然界に生息する植物として特異な特徴を有している。それは、自然界において自力で子孫を残せないことである。穂軸にはたくさんの種子が実るものの、苞被に幾重にも

包まれているため、結実しても子実をまき散らすことができないからである〔酒井2011: 207; ローズ2012: 211〕。この特異な点は、現在も続くトウモロコシの祖先種に関する議論からも見てとれる。現在、世界中で栽培化されている作物は、人びとに都合の良い変種が選択されることで現在の姿・形となったため、野生種と性質も形も異なっている場合がほとんどだが、主要作物の大部分はすでに祖先種となる野生種が見つかる。トウモロコシだけが唯一まだに野生種が発見されていない〔酒田2011: 207-208〕。言い換えれば、長い年月をかけた栽培化の過程で、祖先種の特長が困難になるほどの進化を遂げるに至った。現在のトウモロコシの“人の手がなければ繁殖することができない”という植物としての特徴は、まさに人とトウモロコシの関わり方の深さを示唆する。トウモロコシは、メキシコの地で栽培が開始されて以来⁹⁾、長い年月の間、その地でトウモロコシ農耕を営む人びとと相互に関わり合ってきた。この相互依存ともとれる両者の関係は、人びとの食料源となるトウモロコシの繁殖のプロセスに加担する「人」という役割から理解することができる。

2.2 生活文化のなかのトウモロコシ

人の手による収穫・播種という一連の作業が必然的に大きな意味を持つトウモロコシ栽培に古くから従事してきたメキシコの人びとが、トウモロコシに強い関心を寄せてきたことは、生活文化のなかの種々の要素に見出すことが可能である。現在のメキシコを含むメソアメリカ文化圏¹⁰⁾は、「トウモロコシ、マメ類、アボガド、カカオなどを基盤とする、メキシコからホンジュラス、ニカラグアにかけての農耕文化圏をいう。その中で、文化要素としてのトウモロコシの占める比重が大きいことにより、トウモロコシ文化圏ともいわれる」〔戸澤2005: 21〕と指摘されている。トウモロコシ農耕の重要性は、(a) 神話・伝説 (b) 図像 (c) 農耕儀礼 (d) 食文化など、生活文化の各局面から理解することができる。以下、簡単にその特徴を列記する。

(a) 神話・伝説: メソアメリカに残る神話のなかでは、トウモロコシは、①人類創造の際の原料、②神の身体の一部から発生したもの¹¹⁾、③死の世界と生の世界を媒介するもの¹²⁾、として描かれている。マヤの神話『ポポル・ブフ (Popol Vuh)』のなかの人類創造に関する記述では、人はトウモロコシの練り粉マサによって創られたとされている。

(b) 図像: トウモロコシは、メキシコに現存する考古遺跡や絵文書のなかにも豊富に描かれている。トウモロコシの図像は、形成期オルメカ¹³⁾にすでに存在し、その後にメキシコの地に栄えた数多くの文明・王国の遺物からも発見されている。なかでも、マヤの人びとはトウモロコシに強い関心を持っていたことで知られ、彼らが人間を描く際に頭部を縦長に変形させたのは、トウモロコシの細長い穂に似せるためだったとも考えられている。ミラー、タウベ (2000) は、「人の手を借りなければ繁殖できないトウモロコシは、人の友であり仲間であると考えられていた」〔ミラー、タウベ2000: 234〕と、人の手による収穫・播種といった一連の介入を必要とするトウモロコシの植物的特徴から、トウモロコシの図像の多さを説明している。

(c) 農耕儀礼: 先スペイン期の儀礼に関しては、その多くがトウモロコシの農事暦に対応していたことが指摘されている。農耕儀礼は、植民地時代を経て、カトリックの祝祭を習合するかたちで継続してきたが、それは、トウモロコシを主要な食料源とする人びとにとって、天候が日々の生活のなかで最も重要な要素であり続けているためである。さらにGood (2002) は、「儀礼は、農業の生産性を保証するためのものであり、自然界を機能させ、人間の活動に調和させ得るものにするために大変効力があり、

その際、主要な食料源とされるトウモロコシは、儀礼プロセスに不可欠であり、自然世界との調和を保つために重要であった」[Good 2002: 247] とし、トウモロコシに期待されていた役割（自然と人間界の懸け橋としての機能）を指摘している。

(d) 食文化: トウモロコシの初期の食べ方は、熟したトウモロコシの粒を柔らかくなるまで茹でる、もしくは乾燥した粒を石の上で叩いて磨りつぶして粥を作るかのいずれかであったが、紀元前2000年頃に石灰や木炭などを使用してアルカリ処理する（石灰水で煮込む）方法が現れて以降、トウモロコシは食の中心を占めるようになったという [酒井2011: 213-214]。アルカリ処理をすることで、トウモロコシの穀粒を包む皮がはがれやすくなるとともに、トウモロコシ食で不足しがちなタンパク質・ナイアシンを科学的に子実内から放出することが可能となった [サンティッチ, プライアント2010: 31, 228; 酒井2010: 212-213]。現在のメキシコには、バラエティー豊かなトウモロコシ料理が存在する。ウィトラコチェと呼ばれるトウモロコシの変異種も料理の一種として食されるなど、日々の食卓のなかに深く根づいている。

2.3 近代化とトウモロコシ

トウモロコシは、20世紀半ば以降に、国際的な農業政策の影響を受けることになった。その中でも重要なのは緑の革命とNAFTAである。以下、簡単にその内容を説明する。

(a) 緑の革命: 1821年のスペインからの独立以降、ディアス政権下（1876-1880, 1884-1910）において、西欧を手本とする急激な近代化が進められた結果 [青木1998: 262-266]、農業部門は、①工業化に必要な外貨獲得のための輸出産品を生産し、②都市の労働者に安価な食糧を供給するという2つの役割を担われ、生産効率の向上という“農業の近代化”が求められた。そして、1943年¹⁴⁾、メキシコで「緑の革命」(revolución verde) が始められた [Ruiz Díaz 他2006: 10]。新品種の導入、化学肥料・除草剤などの「近代的投入物 [吾郷1985: 2]」¹⁵⁾ が広められ、生産性の高い農業の実現、すなわち農業の近代化が模索された [吾郷1985: 2-4; Ruiz Díaz 他2006: 10]。吾郷（1985）は、当時のメキシコ政府とロックフェラー財団との間に、メキシコ農業の生産力向上の方法に関して基本的見解の一致が存在していたことを指摘し、「メキシコ農業の「近代化」を「アメリカ的やり方」で達成すること」 [吾郷1985: 4] が目指されたとしている。

(b) NAFTA: NAFTAとは、1992年12月17日に署名され、1994年1月1日に発効した、カナダ・アメリカ・メキシコ3か国による自由貿易協定である。NAFTA締結によって、関税の完全撤廃が規定され、それまで政府の補助金によって保護されていたメキシコの主要作物であるトウモロコシは、14年という猶予はあったものの、2008年にそれが適応されることとなった。NAFTA締結に関しては、トウモロコシがメキシコという国で有する、経済的・社会的・文化的役割の大きさから、多くの議論を巻き起こした。さまざまな立場から激しい反対論が主張され、①トウモロコシの経済的重要性に着目し、国内のトウモロコシ産業（特にトウモロコシ生産の大部分を支えているとされる農村部に住む零細農家の人びと）への影響を懸念するもの、②トウモロコシの文化的・象徴的重要性¹⁶⁾ に依拠した、メキシコがアメリカに自国の文化を売り渡したとするものなどが挙げられる。こうして、NAFTA締結は、複雑な議論を巻き起こすとともに、国内のトウモロコシが外部のトウモロコシとの競争にさらされることとなった。



図1. チアパス州 (筆者作成)



図2. チアパス高地と3つのムニシピオ
(メキシコ内務省連邦・市町村開発院
2010報告より、筆者加筆)

以上のように、メキシコのトウモロコシは、近代化の流れのなかで、緑の革命による新たな科学技術の導入・NAFTAの締結による市場経済の介入などの社会状況の変化や外部からの働きかけに直面している。こうした状況下において、地域社会の人びとのトウモロコシ観や伝統的なトウモロコシ農耕はどのように変化しているのだろうか。

次章からは、筆者がフィールドワークをおこなったチアパス高地の実態に基づいて、よりミクロな視点で議論を進めていくこととする。

3. チアパス高地の地域社会

3.1 自然と生業

チアパス高地 (los Altos de Chiapas) は、メキシコ最南端の州¹⁷⁾であるチアパス州の高原地帯に位置している。州人口は、およそ4,796,580人¹⁸⁾。西側を接するオアハカ州とともに先住民人口の割合が多い¹⁹⁾ことで知られている (図1)。

チアパス高地には、州人口の約10分の1に当たる480,827人が居住し、57.2%²⁰⁾はインディオであるとされている。主にソチル族、セルタル族、トホナバル族が居住している。面積は3,770km²であり、国家行政の基本単位となるムニシピオ (municipio) が18存在する。この地域の行政中心地はサン・クリストバル・デ・ラス・カサス市 (San Cristóbal de Las Casas, 以下サン・クリストバル市) に置かれている。気候は、1年を通して低温な、温帯もしくは冷帯に属する。降雨に関しては、雨期 (5月-10月) と乾期 (11月-4月) が存在する。

チアパス高地は、パン・アメリカン道路 (Carretera Panamericana, Carretera Internacional)²¹⁾沿いにあり、チアパス州の州都トゥクストラ・グティエレス (Tuxtla Gutiérrez) からは直線距離でおよそ80kmである。パン・アメリカン道路が1950年代に完成したことにより、隣州のオアハカ州や隣国グアテマラとの行き来が容易になったうえに、1952年から1962年にかけて全国先住民庁によってサン・クリストバル市と周辺の先住民村落を結ぶ新たな道路約120kmが造成されたという [小林1999: 111]。

筆者は、チアパス高地の18あるムニシピオのうち、主にサン・クリトバル (San Cristóbal de Las Casas) 市、テオピスカ (Teopisca)、アマテナンゴ・デル・バジエ (Amatenango del Valle) の三か所で調査をおこなった (図2)。

サン・クリストバル市は、植民地期の統治区域の行政中心地であり、1892年8月9日に州都が正式に現在のトゥクストラ・グティエレスに移されて以降もチアパス高地の行政・経済・産業の中心であり続けている。清水（1988）は、サン・クリストバル市に暮らすようになった先住民村落出身者を「ラディーノ」²²⁾とみなす当時の村びとたちの様子を描いているが、現在もサン・クリストバル市を「ラディーノの街」として特別視する傾向がみられる。サン・クリストバル市内にある常設市場には、種々の野菜や果物、鶏をはじめとする精肉、日用品、織物や陶器といった民芸品を売りに、周辺の先住民村落から多くの人が集まり、品物がとところ狭しと並べられる。さらに、近年では、サン・クリストバル市は観光地として注目を集め、国内外から多くの観光客が訪れている。2003年には、メキシコ政府の観光事業の「プエブロ・マヒコ (pueblo mágico: 魅惑的な村という意味)」²³⁾の1つとして指定され、観光都市として一躍有名となった。観光地化に伴い、常設市場での商売のほかに、観光客相手に道端やホテル・ゾーンの遊歩道で民芸品を売るために、周辺の村々からさらに人が集まるようになったという。

チアパス高地では、“サン・クリストバル市とその周辺の先住民村落”という表現でよく語られる。サン・クリストバル市では、市内の飲食店や宿泊施設でのサービス業に従事したり、州都トゥクストラ・グティエレスおよび近隣の大都市へ出稼ぎしたりする者が増加している一方、テオピスカとアマテナンゴ・デル・バジェでは、トウモロコシ農耕に従事する人が多数を占めている。しかし、周辺の先住民村落も決して孤立した存在ではなく、地域の拠点であるサン・クリストバル市への定期的なアクセスにより、同市を接点とした外部社会への開放性を有している。

テオピスカは、サン・クリストバル市の南方約30kmに位置する。サン・クリストバル市内からグアテマラへと向かうパン・アメリカン道路の途中にあり、車でおおよそ30分ほどである。人口は37,607人²⁴⁾、セルタル族の村として知られている。標高の一番高い地点は1800メートルほどで、平均標高1,940mのサン・クリストバル市の人びとによると、テオピスカは「熱い土地 (Tierra Caliente)²⁵⁾」であるという。テオピスカは、サン・クリストバル市へのアクセスが比較的容易という条件から、まさに「ラディーノ化」しつつある先住民村落のひとつだといえる。サン・クリストバル市の人びとから見れば、先住民村落のひとつとして括られるが、後述するアマテナンゴ・デル・バジェの人びとは、テオピスカの人びとをしばしば「ラディーノ」と呼ぶ²⁶⁾。プラサには、半袖シャツにジーンズをはき、麦わら帽子をかぶった男性と、派手な色のブラウスやワンピースを身にまとった女性が行き来しており、サン・クリストバル市内の様子とさほど変わらない。農業の他には、サン・クリストバル市内に働きに出る者も多い。

アマテナンゴ・デル・バジェ（以下アマテナンゴ）は、テオピスカの東部約10kmに位置する。人口はおおよそ8,728人²⁷⁾で、セルタル族の居住する村である。標高の一番高い地点は1810メートルで、テオピスカと同様に「熱い土地」に属するとされる。アマテナンゴの人びとの多くは、自分のことを「インディオである」（アマテナンゴでの聞き取り2012.07, 2013.07）と表現するが、サン・クリストバル市やテオピスカに比べると、その言葉通り“先住民的な”暮らしが残っていると感じられる光景がいくつかある。例えば、大部分の女性は鮮やかな色の刺繍の入った民族衣装を身にまとっている。さらに、住民同士はセルタル語で会話をする。スペイン語を理解できる人の数もテオピスカに比べると圧倒的に少ないという。教会では、セルタル語とスペイン語の二か国語でミサが行われ、先住民女性信者が司祭の言葉を翻訳していた（図3）。

アマテナンゴは、チアパス高地の民芸品として名高い陶器（barroまたはcerámica）づくりで有名な村



図3. 民族衣装を着た女性たちと一面に広がる
ミルパ、アマテナンゴ (2013.07)

1月	2月	3月	4月	5月	6月
	播種	ミルパ掃除①	ミルパ掃除②		
7月	8月	9月	10月	11月	12月
エローテ (白) エローテ (黄)			収穫		(ミルパ掃除)

Temporada de lluvia (雨期) : 5月-10月

Temporada de que no hay lluvia (乾期) : 11月-4月

図4. チアパス高地 (高原地域)・天水農地でのトウモロコシの農耕暦

で、陶器はサン・クリストバル市の土産屋や市場でも売られている。村人たちの話によると、アマテナンゴでは、陶器作りは女性の仕事、トウモロコシ作りは男性の仕事とされ、女性は少女時代に母親から陶器の作り方を習うという。こうしてできた手作りの陶器を、サン・クリストバル市の市場に売りに行く女性も多い。

サン・クリストバル市・テオピスカ・アマテナンゴの現在の様子からは、道路の開通や、サン・クリストバル市内の市場への定期的なアクセスによって、“先住民村落”と称される村々も、外部社会に対して開かれた存在となってきていることが明らかとなった。

トウモロコシ農家の1年間の農耕暦は、聞き取りによれば以下の通りである (図4)。

2月の終わり頃に種まき (siembra) をし、トウモロコシが成長する3月と4月にリンピア (limpia) と呼ばれるミルパの掃除 (雑草取りなど) をおこなう。7月の中旬頃から白トウモロコシのエローテ²⁸⁾、下旬から8月にかけて黄色トウモロコシのエローテを一部収穫する。その後トウモロコシはミルパに放置され、乾期が始まる10月の終わりから11月の初旬にかけてタピスカ (tapisca) とよばれる本格的な収穫が行われる。12月の終わりには、翌年からのトウモロコシ栽培に向け、ミルパの掃除を簡単に行う。

3.2 歴史的背景

チアパス高地に居住する人びとは、古くからモノには魂 (alma)・現地語では“チュレル”が宿っていると考えていた。彼らの生活の糧はトウモロコシであり、トウモロコシ農耕にはとりわけ強い関心が寄せられてきた。人びとは、男性と女性それぞれが各々の役割を遂行するかたちでトウモロコシの生産活動に従事していた [Guiteras 1965; Petrich 1998]。同様に、生活の糧となるトウモロコシを与えてくれる“大地 (la Tierra)”をすべての生命の源であると認識し、大地も魂を持った存在だとみなし、「母なる大地 (Madre Tierra)」と称して大切に扱っていた。ギテラス (1965) によれば、大地は、彼らの考える宇宙に存在するなかで最も強力な力を持ち、創造と破壊の力を併せ持つものだと信じられていた。つまり、大地は、生命の普遍的な母であると同時に、その破壊の力に対して熱心な祈りや供物を捧げ続けなければならない存在でもあった [Guiteras 1965: 234]。さらに、現地で“Anjel”と呼ばれる天気をつかさどる雨の神・山の神を信仰しており、トウモロコシを守護する存在だと認識されていた。'Anjelも大地と同様に、ミルパを守る一方、破壊的な一面を有しており、落雷や旱魃を引き起こす力があると信じられていた。こうして、当時の人びとにとって、母なる大地と'Anjelは大切に扱うべき存在・熱心な祈りと供物を捧げるべき対象であり、1年に3度の農耕儀礼のなかで供物の献呈が行われていたという [Guiteras 1965: 235-236]。こうして、大地やトウモロコシには魂が宿っているというチアパス高地の古い宇宙観のなかで、人びとは自然との間に霊的な関係を有していた。

チアパス高地に居住するマヤの人びとの伝統的農法は、①焼畑と②「三姉妹」²⁹⁾と呼ばれる混植栽培法によるトウモロコシ農耕であった。①焼畑は、ミルパを耕作地として一定期間使用した後、畑を焼き、次に使用するまでに約4～50年の休閑期間を設ける。これは、土壌の肥沃回復のために、植物の自然発生的な再生を待つ。②三姉妹農法は、ミルパでトウモロコシ・フリホル豆・カボチャを同時に栽培する方法である。これは、栄養のバランスのとれたバラエティー豊かな食を実現させ、悪天候や病気の影響でトウモロコシが生育しなかった際の備えとしての役割を果たすだけでなく、ミルパの地力を維持するためにも優れたシステムであった。マメ科植物であるフリホル豆の生物的窒素固定³⁰⁾により、ミルパの地力が改善され、地を這って育つカボチャの葉により、地表面からの水分の蒸発および雑草の繁茂を抑えることができた [酒井2010: 211-212]。

3.3 外部からの働きかけ

(a) 緑の革命

緑の革命は、1943年よりメキシコ国内で開始されたが、その取組みがチアパス高地で行われたのは1960年代からである [Ruiz Díaz 他2006: 8-10]。品種改良されたトウモロコシの種子が配布され、一部の地域では、化学肥料および除草剤等の化学薬品の普及活動も行われ、単位面積当たりのトウモロコシ生産量は増加していった。

チアパス高地に位置するチェナルオ (Chenalhó) における調査では、緑の革命技術による一連の取組み (改良品種、化学肥料、除草剤等の導入) によって、①休閑期間の減少②農具の変容③ミルパへの化学薬品の投入という変化がみられたと報告されている [Ruiz Díaz 他2006: 11]。1967年には化学肥料、1978年には除草剤の使用が開始され、1985年には、すでに多くの農民たちは化学薬品を試験的に使用するのではなく、トウモロコシ農耕に必要な不可欠なものとして購入し、使用するようになったという [Ruiz Díaz 2006: 20]。また、鋤は、雑草の除去・作物の収穫・家屋の修理に使用され、従来のチアパ

ス高地での生活になくはならない道具であったが、除草剤の普及に伴い、人びとは鋤による重労働をやめ、除草剤へと依存するようになっていった。

しかし、品種改良トウモロコシの種子の使用に関しては、現地のトウモロコシ農家の人びとに反対されたという報告がいくつかあがっている³¹⁾。これは、農民たちが先祖代々受け継いだ種子の使用を望んだこと³²⁾、改良品種の種子は一世代限りであるため一度使用すると継続的に買い続けなければならないことが理由として考えられる。

以上のように、「緑の革命」による新技術の導入は、従来の伝統的農法を化学肥料・除草剤に依存した新しい農法へと変化させ、①ミルパの地力の衰退を招くとともに、②トウモロコシの生産を維持するため、農民たちを化学薬品の購入費の支払いに縛り付けることとなった。さらに、フィールドワークでは、農民間の意識と財力の差による違いも観察された。

農薬の使用は、しばしばトウモロコシ農家の人びとの間でもめごとの原因となる。ミルパの地力の悪化を問題視し、化学薬品への依存を断った、または断つための取組みを行っている農家にとって、近隣の農家から飛散してくる農薬は脅威とみなされる。有機農法でのトウモロコシ栽培に取り組んでいる農家でのフィールドワーク中、「となりの農薬が飛んでくる。」「奥の農家は収益のことしか考えていない。あんなにたくさん農薬をまいて…こっちに飛んでこないで欲しい。」(テオピスカ、アマテナンゴでの聞き取り2012.06-07, 2013.07)というつぶやきを幾度となく耳にした。さらに、除草剤を使用する家庭のトウモロコシのみが育ったミルパを見て、自分たちのミルパの生物的多様性を強調したり、肥料の過剰使用によるトウモロコシの弱体化を指摘したりする語りも聞かれた³³⁾。化学薬品を使用し続けることは、毎年莫大な費用を捻出する必要があることを意味する。財力がある農家は化学薬品を大量に購入して大規模な農耕をおこなう一方、費用をまかなうことが困難な農家は、限られた化学薬品の投入で農耕を営まざるを負えないという二極化が生じている。

(b) NAFTA 締結

NAFTA 締結に関しては、アメリカから安価なトウモロコシが大量に流入することによる価格変動等の負のインパクトが懸念されていた。しかし、自家消費型の農耕を営む農家が大多数を占めるチアパス高地では、市場での取引価格はあまり影響がないようである。

フィールドワークにおいても、NAFTA の脅威は、経済的影響ではなく、外国産（特にアメリカ産）トウモロコシの流入が問題とする見方が多かった。それは、遺伝子組み換えトウモロコシによる地域のトウモロコシへの汚染というかたちで語られる。

3.4 内部の応答—揺れ動くトウモロコシの価値—

トウモロコシを取り巻く社会状況の変化によって、古来のトウモロコシにまつわる習慣や、日々の生活のなかでのトウモロコシの位置づけや価値も変化してきた。1本のトウモロコシを有効利用する習慣やトウモロコシへの愛着など、人びとの生活のなかに現在も深く根づいている価値がある一方で、農耕儀礼の衰退という明らかな変化も観察され、現状はまさにトウモロコシの位置づけが“揺れ動いている”最中ともいえる。こうした状況のもと、自分たちのトウモロコシを“価値あるもの”として再発見していくという内部からの新たな反応も観察することができた。

(1) 生活の中心に据えられ、有効利用されるトウモロコシ

チアパス高地では、トウモロコシの生産活動に関し、男女で役割分担がされているが、各々の役割を

遂行するかたちでトウモロコシと関わり合いながら1日の生活リズムが刻まれている。女性は、日の出前の朝3時から4時頃に起床し、前日に準備していたニスタマル（トウモロコシを石灰と茹でて柔らかくし、薄皮をはいだもの）を洗い、製粉機で碾き、トルティージャを作る。男性は、朝食をたっぷり食べたのち、ミルパでの畑仕事を行う。女性は、一日の大半を台所で過ごし、あたたかな作りたてのトウモロコシ料理を毎食調理する。こうした農家の人びとの一日のサイクルは、彼らが子どもだった時とあまり変わらないと言い、現地の人びとの言葉によれば「私たちの生活の中心はトウモロコシ。トウモロコシがなければ、私たちの暮らしたって、私たちの国だってない。」（テオピスカでのレイナからの聞き書2012.07）ということである。

さらに、トウモロコシは食糧としてだけでなく、葉や家屋の材料にもなる、日々の生活に欠かせない重要資源であり続けている。トウモロコシの髪（pelo del maíz）と呼ばれるトウモロコシの絹糸部分は、煎じて利尿に効く茶として飲用される。そのため、トウモロコシを収穫する際には、穂軸から出ているトウモロコシの髪を取り除き、捨てずにまとめて保管しておく。家族の誰かが体調不良の場合には必ず煎じて飲む茶であると言い、利尿に限らず、体調不良の際の先人たちから伝わる知恵薬として、その役割が期待されているようである。また、トウモロコシの茎は、頑丈であるため家屋を作る材料として使用され、平たく大きな葉は、タマレスを調理する際に包みとして利用される。茎や葉は、有機肥料を作る際の原料としても用いられる。

こうして、ミルパから収穫されたトウモロコシは、ほとんど余すことなく人びとの生活のなかで利用されていく、“生活の糧（sustento de la vida）”となっている。

（2）トウモロコシへの愛着

トウモロコシ農家の人びとにとって、自分のミルパでとれたトウモロコシの種子は格別な存在である。第1章で既述した通り、トウモロコシは自然界で自ら繁殖することができない。つまり、トウモロコシの生産・生育状況は、収穫・種子の保管・播種という人の一連の作業に多くを負っているため、人の介入が必然的に大きな意味を持つことになる。

人とトウモロコシの相互依存の関係から、チアパス高地の人びとは、トウモロコシの種子への強いこだわりを持っている。現地では、トウモロコシの生産活動に関し、女性にもう一つ重要な役割が与えられている。それは、トウモロコシの種子を選抜し保管する役割である。女性たちは、トウモロコシの穂軸の大きさ・子実のつき方・成長の早さなどからトウモロコシの種子を選別し、翌年再びミルパに播くまでの間、種子を害虫から大切に守る役割を負う。トウモロコシの種子に関しては、「保管する、守る」を意味する「guardar」という動詞以外に、「世話をする（cuidar）」という動詞が使用される。冬の間“世話をした”トウモロコシの種子を再びミルパに播くのである（図5）。

こうして、“代々受け継がれ、自分のミルパでとれた”トウモロコシで農耕を営んでいくという習慣がチアパス高地には深く根づいている。それは、「他所からの種子は入れない、汚れているから（contaminado）」（テオピスカ、アマテナンゴ、テネハバでの聞き書2012.06-07、2013.07）という村人たちの言葉からも明らかである。現地では、トウモロコシの播種や収穫の際、手伝ってくれた人に報酬としてトウモロコシの種子を渡すことが主流となっているが、他人から受け取ったトウモロコシも原則自分のミルパに播くことはないという。

（3）トウモロコシの宗教的意味の減少—衰退するサンタ・クルス（Santa Cruz）の祭り

テオピスカ、アマテナンゴの調査では、農耕儀礼をおこなっているという農家に出会うことができな



図5. 大切に保管されるトウモロコシ (2012.07)



図6. 「水の目」のサンタ・クルスの祭りの後の様子 (2013.07)

かった。播種前に自宅の祭壇にタマレスを供えて1年間の農耕の祈願をおこなうなど、各家庭の判断により簡素化している様子が見えられた。

テオピスカの調査中滞在させてもらったレイナ (Reyna) の家庭では、農耕儀礼は一切おこなわないという。農耕儀礼をおこなわないという彼女であるが、インタビューの際は、母なる大地 (Madre Tierra) の重要性を熱心に語る。彼女の考えによると、適切な農法 (化学薬品を使用しない農法) や良い食事 (有機肥料) によって母なる大地をいたわることは可能であり、農耕儀礼をおこなうことよりも、日々の感謝を忘れず、こうした農法で大地を大切に扱うことの方が重要である。

テオピスカでは、近隣の小山の湧水が農業を営む際の源泉となっている。源泉は、「水の目 (ojo del agua)」と呼ばれ、降雨を祈願するサンタ・クルス (Santa Cruz) の祭りがおこなわれる地点ともなっているが、この祭りもずいぶん縮小化しているという。その理由は、村人たちの話によると、年々「水の目」の地点に残っている飾りつけや供物の数が減っていることから、儀礼に参加し供物を捧げに訪れる人の数も減少していることは自明であるということである (図6)。

さらに、赤トウモロコシが儀礼用のトウモロコシであるという語りはよく耳にするものの、実際の体験談として語ってくれる人に出会うことはなかった。赤トウモロコシは、古くから病気に効く大きな力を持ったトウモロコシであると考えられてきたが、農耕儀礼の衰退に伴い、その宗教的価値が減少し、食べ物としての役割の方が重視されてきているようであった³⁴⁾。

4. トウモロコシの「近代化」と再評価

近年では、トウモロコシを取り巻く社会状況の変化や外部からの働きかけに伴い、自分たちのトウモロコシを“価値あるもの”“守るべきもの”として再発見する動きも起こっている。以下では、この新しい動きの実態を報告して検討する。

4.1 プロジェクト「ムヘーレス・イ・マイル (Mujeres y Maíz: 女性たちとトウモロコシ)」

ムヘーレス・イ・マイルは、トウモロコシの生産活動のなかでの女性たちの主導権を強化することを目的に、2008年に創設された。現在、プロジェクトはチアパス高地に位置するサン・クリストバル市・テオピスカ・アマテナゴの3つの共同体に暮らす33人の女性たちで運営されている。

表1. トウモロコシにつけられる修飾語

Local	地元の
Nativo	その地生まれの
Propio	その地に固有の
Criollo	クレオールの, 土着の
Híbrido	科学交雑を経た
Mejorado	品種改良された
Tecnificado	科学技術による過程を経た
Curado (semilla (種子) とセットで使われることが多い)	加工された
Transgénico	遺伝子組み換えの
Limpio	きれいな
Sano	健康的な
Sabroso	美味しい
Sucio	汚い
Nuestro	我われの

プロジェクトの目的は、当初のそれより大きくなり、現在では“地元のトウモロコシの生産・調理・消費全体を強化し、チアパスの食糧の主権 (soberanía alimentaria) を構築すること”であるという。言い換えれば、地域のトウモロコシの生産者－処理・調理者－消費者を結び付け、「(我々の) トウモロコシ文化 (cultura del maíz)」を確立させるのである。

そのために、トウモロコシの一連の生産活動のなかの「調理」過程において鍵となる女性たちの仕事環境（調理する環境）を改善するため、トウモロコシ製粉機・浄水器・かまどを普及させるとともに、トウモロコシ食品の質や衛生を高めるため、集会を開いて健康や栄養に関する勉強会を主催している。2011年10月からはレストラン「ラ・ミルパ (la milpa)」を開店し、地元の食品やプロジェクトメンバーの手作りのトルティージャを提供するとともに、さまざまな調理法や健康的な料理を教えている。メンバーの一部の女性たちは、サン・クリストバル市の「有機食品市」に参加し、収穫物や手作りの料理を販売している。

4.2 プロジェクト参加女性たちのトウモロコシに関する発言

本節では、プロジェクト「ムヘーレス・イ・マイス」に参加する女性たちに対するインタビュー調査のなかで得られた、トウモロコシに関する言説を記述する。

以下、4人の女性の言説を〈事例1〉から〈事例4〉として紹介する。煩雑をさけるため、会話の流れを残しつつ、トウモロコシに関する語り以外は可能な限り省略し、各女性のトウモロコシに対する考えや評価が明らかになるよう心掛けた。また、トウモロコシに付与された意味を明確化するため、トウモロコシを語る際につけられた修飾語は、録音データまたはノートの中の記録から忠実に再現している。

女性たちの言説のなかで出てくるトウモロコシの修飾語および本稿のなかの訳語は、以下の通りである（表1）。

〈事例1〉ルーシー (Lucy) (2012.05; 2012.06-07; 2013.06-07)

(プロジェクトの目的のひとつとして、クレオール・トウモロコシの保護の重要性について語ってもらった後)

・クレオール・トウモロコシとは何ですか？

「地元でとれたトウモロコシのことよ。先祖代々受け継がれて、長い年月をかけてそれぞれかけ合わせられ、選抜され、現在まで続いているトウモロコシ。これを守りたいの。」

・クレオール・トウモロコシを守るといって？

「ほら、いま遺伝子組み換えのトウモロコシとか…そういうものが入ってきて。昔とは少し変わっているから。」

・それでは、遺伝子組み換えトウモロコシはいったい何が悪いのですか？

「遺伝子組み換えトウモロコシの健康への悪影響についてはよくわかっていない。というのは、そのことをはっきりと示す研究は存在しないから。ただ、我われが認識していることは…つまり、遺伝子組み換えトウモロコシの問題であると考えていることは、環境への影響と、クレオール・トウモロコシの種子を守ることを阻害してしまうこと。」

・遺伝子組み換えトウモロコシはなぜメキシコに入ってきてしまっているのですか？

「メキシコがアメリカと結んだ条約 (NAFTA を指す) よ。条約による市場経済の影響については私にはよくわからないけれど…この条約についてただひとつ言えることは、アメリカから (遺伝子組み換え) トウモロコシが入ってくるということ。(メキシコ) 政府は種子のかたちでのトウモロコシの輸入を禁止しているからおそらく入ってきてはいないと信じているけれど、でもそれもわからない。あんな事件もあったし³⁵⁾。」

・クレオール・トウモロコシの種子を使うことのメリットは何ですか？

「クレオールの種子を使うことのメリットは…農民たちによって代々選抜されて、世代を超えて受け継がれてきたものだから…だから、その地域の環境条件に適しているし、その土地の嗜好に合っている。それと、多様性があること。たくさんの種類の種子…トウモロコシの高い多様性があるから、環境の変化や病気等があった時も、抵抗力があり、高い生産性につながる。遺伝子組み換え種子の悪い影響は、すべて均質化してしまうこと。クレオール・トウモロコシの方が、抵抗力があって、生産力がある。」

〈事例2〉ルセルバ・バスケス (Lucelva Vásquez) (2012.07; 2013.06)

(サン・クリストバル市に住むルセルバは、ミルパを所有しておらず、毎日の食事に欠かすことのできないトウモロコシを買わなければならないと語る。)

・トウモロコシを買わなければならないのですね。ところで、ここ (レストラン「ラ・ミルパ」) で稼いだお金はどうしているのですか？

「稼いだお金はもちろんトウモロコシを買うために使っている。私の家はミルパがないからね。毎日トルティージャを食べるためには、たくさんトウモロコシを買わなければならない。」

・トウモロコシはどのようなものを選んで買っているのですか？

「地元のトウモロコシを選んで買っている。買う時は私が選べるからね、そりゃあ地元のトウモロコシを選ぶさ。」

- ・なぜ地元トウモロコシを使った方が良いと思うのですか？

「遺伝子組み換えトウモロコシからは、遺伝子組み換えトウモロコシだけが生るでしょう（遺伝子組み換えトウモロコシしか実らない）。でも、多くの人はそのことを知らずに遺伝子組み換えトウモロコシを消費している。恐ろしい…。地元トウモロコシと遺伝子組み換えトウモロコシとは大きく違うのだから。」

- ・地元トウモロコシはなぜ違うのですか？

「地元トウモロコシは、私たちの祖先が育て、種を選別し、守ってきたものだから。だからいろいろなトウモロコシが長い時間かけて混ざりあってきたものなのよ。遺伝子組み換えは汚いトウモロコシだから。」

〈事例3〉ビッキー (Vicky: María Victoria Díaz Díaz) (2012.07; 2013.06)

（ビッキーは、彼女の父がミルパでのトウモロコシ農耕に従事していたことから、幼少期からトウモロコシ栽培の手伝いをしてきた。現在は、コーヒー栽培で有名なチェナルオ出身の夫とともに、コーヒーおよびトウモロコシ農耕に従事している。）

- ・トウモロコシの栽培について自由に語ってください。

「ある時期は（1994年前後）は肥料や除草剤を使っていた。でも、化学薬品を使用して以降、ミルパの状態が変わってしまって…そして、大地がだんだん消耗していることにも気づき、使用を中止した。現在は、有機肥料 (abono orgánico) のみを使用している。これによって、すべてのものが実るようになったし、（化学薬品を使用していない）自分たちの畑で収穫した作物は味が違う（美味しい）。」

- ・なぜ肥料や除草剤を使ってみようと思ったのですか？

「父が誰かに勧められて。どんなものかもわからなかったし、良いものかと思って。でも違った。土地はみるみる衰弱してしまった。完全に有機肥料にするまではトウモロコシを買わなければいけなかった。」

- ・それでは、現在はもうトウモロコシを買うことはないのですか？

「自分たちのミルパに実るトウモロコシで日常の食事は間に合っている。黒または青トウモロコシ³⁶⁾が必要ななら買うけどね。」

- ・どのようなトウモロコシを買うのですか？選ぶ時のこだわりなどはありますか？

「（売っているトウモロコシを見分けることはできないと発言しながらも、）遺伝子組み換えトウモロコシは買わない。クレオール・トウモロコシは美味しく、より健康的。なぜなら化学薬品を使っていないから。有機肥料で育った作物の方がずっと良い。」

〈事例4〉レイナ (Reyna) (2012.07; 2013. 06-07)

（レイナはミルパを所有しているため、トウモロコシの他に、フリホル豆・レモン・バナナ・オレンジなども収穫することができる。）

- ・ミルパからこんなにいろいろな種類の作物が収穫できるなんてすごいですね。

「ありがとう。何よりも大切なのは、母なる大地をいたわること (cuidamos la Madre Tierra) だよ。母なる大地をいたわれば、すべてのものがよく実るのだから。」

- ・母なる大地をいたわるとはどのようなことですか？

「大地を守るために、私は除草剤 (líquido) や化学肥料 (abono químico) を絶対に使わない。ミルパでは、有機肥料 (abono orgánico) のみを使用している。こうして栽培したトウモロコシは、健康的。大事にされた母なる大地からは、きれいなトウモロコシが生るのだから。さらに、こうした大地の状態に気を配る栽培方法 (有機農法) によって、母なる大地を回復させることもできる。以前 (1970年代) のプロジェクトでは、化学薬品 (químico) を配ってくれたが、作物がたくさん病気になったから使用を中止しようと決めた。そうしたら、完全に化学薬品を断つのは大変だったけれどね…大地はこうして回復してくれた。」

・「有機食品市」で販売しているトルティージャの山を見て) こんなにたくさんのトルティージャを一人で作っているのですか？

「自宅では、2人の娘が家事を手伝ってくれている。彼女たちはトルティージャももちろん上手に作れる。平日は学校があるから土曜日に手伝ってもら。私の子どもたちは、トルティージャ作りから、家の掃除、ミルパでの畑仕事まで、きちんとやり方を知っている。なぜなら、子どもたちにしっかり教えたから。そして…次は彼らもそれを彼らの子どもに教えていかなければならない。我われは、我われの習慣を失ってはならないから。」

・このトルティージャの販売で得られたお金はどのように使われるのですか？

「トルティージャを売って得たお金は、家庭での出費にあてる。さらに、また翌年も同じように農業をするために、ミルパの世話をするお金が必要となるからね。ミルパの病気などもあるから。」

・お子さんにはこれまでの習慣を忘れるなど…？

「子どもたちに対して、本業が勉強であったとしても、同じように家での仕事を忘れてはいけない。我われの根っこの部分を忘れてはならない、どこから来たのか、どこで生まれたのか…という話をしてい。家事もそうだけど、ミルパでの仕事もね。トウモロコシは生活のすべて (toda la vida)。もしトウモロコシがなければこの国だってない (si no hay maíz, no hay país) からね。昔の人びとは、大地をいたわり、そして今よりずっと健康的だった。母なる大地から作物が収穫され、健康的な食事をしてきたから。現在の我われの生活は病気だらけ³⁷⁾。もし我われが私たちの母なる大地をいたわらなければ、もう食糧なんてなくなるのだから。だからこそ、食べ続けたければ母なる大地を、そして食物を大切にしなければならない。」

・化学肥料の使用が大地を傷つけるのは理解できました。それでは、なぜ代々伝わるトウモロコシの種子の方が良いのですか？

「遺伝子組み換えトウモロコシは商業用だもの。1回播いてしまうと終わり。クレオール・トウモロコシなら、私たちの父母、祖父母、もっと先の祖先が残してくれたものだから。」

〈事例1〉から〈事例4〉の女性たちのトウモロコシに関する言説をもとに、トウモロコシの意味づけおよび語られる文脈をまとめ、考察する。

〈事例1〉についての考察

クレオール・トウモロコシを守る活動を行う際の敵は、クレオール・トウモロコシの種子の保存を阻害する、外部から入ってきたトウモロコシ (= 遺伝子組み換えトウモロコシ) である。彼女たちが「クレオール・トウモロコシ」を語る際に使用するスペイン語の「criollo (クリオージョ)」という形容詞

は、本国生まれの「ペニンシュール (peninsular: イベリア半島人)」に対し、植民地生まれのスペイン人を指す語である。つまり、「元来の土地 (=スペイン) とは異なる地」である「現地 (=植民地)」で生まれ育ったことを表し、“その地で生まれ育った”ことを表す形容詞として用いられる。(日本語では、「土着の」、英語では「クレオール (Creole)」と訳されるが、“(元来の土地ではない) 現地に根づいた”という中南米特有のニュアンスを残すため、本稿では「クレオール」という語を当てて訳した)。

地域のトウモロコシ: 連続性 (代々受け継がれてきたもの), 地域への適合性, 多様性 (トウモロコシの種類)

外部のトウモロコシ: 均質性

〈事例2〉についての考察

購入する際は、地元トウモロコシを選ぶ。長い年月をかけて交ざり合ってきた地元のトウモロコシに対し、遺伝子組み換えトウモロコシは、遺伝子組み換えトウモロコシしか実らない (均一化していく) ことが脅威であり、“汚い”という。

地域のトウモロコシ: 連続性, 多様性 (トウモロコシの種類), 異種混濁

外部のトウモロコシ: 均質性

〈事例3〉についての考察

自身もトウモロコシを栽培していることから、食物としてのトウモロコシだけでなく、その農法にまで言及している。化学肥料を使って土地が荒れてしまった経験から、有機栽培が良いと考えており、しばしば、クレオール・トウモロコシと有機農法、遺伝子組み換えトウモロコシと化学薬品の使用、という結びつけがされる。チアパス高地にも、農薬を使用する農家と有機農法を目指す農家が混在することから、地域のトウモロコシはより狭義の地域 (=我われ) を指すと考えられる。

本来チアパス高地では、トウモロコシ・フリホル豆・カボチャの混種栽培が主流であったが、化学薬品 (除草剤) を使用したミルパには、耐性のあるトウモロコシしか生育しない。一方、有機農法では、その他の植物も生育可能であることから、ミルパ内部での生物多様性 (他の種類の作物も数多く実ること) を強調する。

地域のトウモロコシ: 有機農法, 多様性 (ミルパ内部の植物の種類) 美味しい, 健康的

外部のトウモロコシ: 化学薬品の使用

〈事例4〉についての考察

自身の化学肥料の使用によって土地が荒れてしまった経験から、母なる大地をいたわること・良い食事 (=有機肥料) を与えることの重要性を強調する。健全に保たれた母なる大地からは、“きれいな”トウモロコシが生するという。母なる大地はすべての源であるとし、自分たちの祖先や習慣、健康な食事などと重ね合わせる。化学肥料や遺伝子組み換えトウモロコシは、母なる大地を傷つけるものであると認識し、代々受け継がれてきたクレオール・トウモロコシや伝統的農法は、母なる大地を大事にするこ

表2. トウモロコシの意味づけと使用されたトウモロコシの修飾語

	地域のトウモロコシ	外部のトウモロコシ	備考
事例1 (ミルパなし)	クレオール 連続性, 地域への適合性, 多様性 (トウモロコシの 種類)	遺伝子組み換え 均質性	
事例2 (ミルパなし)	地元の 連続性, 多様性 (トウモロ コシの種類), 異種混淆	遺伝子組み換え, 汚い 均質性	
事例3 (ミルパ所有)	クレオール, 健康的, 美味 しい 有機農法, 多様性 (ミルパ 内部の植物の種類), 美味し い, 健康的	遺伝子組み換え 化学薬品の使用	農法についても言及
事例4 (ミルパ所有)	クレオール, 我われ, きれ い 有機農法, 連続性, 多様性 (トウモロコシの種類, ミル パ内部の植物の種類), きれ い, 健康的	遺伝子組み換え 化学薬品の使用, 非連続性 (一世代), 病気	農法についての言及 母なる大地・古来の習慣・ 周囲の自然との結びつけ

* 太字は, トウモロコシ「maiz」という語を修飾するのに使われた (「maiz」とセットで使われた) 形容詞

との象徴であるかのように語られる。事例3と同様, 狭義の地域について語られる。

地域のトウモロコシ: 有機農法, 連続性, 多様性 (トウモロコシの種類, ミルパ内部の植物の種類),
きれいな, 健康的

外部のトウモロコシ: 化学薬品の使用, 非連続性 (一世代), 病気

さらに, 母なる大地がすべての生命の源であるという観点から, 健全な母なる大地⇒健康的なトウモロコシ⇒健康的な食事⇒我われ自身の健康という結びつけをしている点, クレオール・トウモロコシを先祖代々伝わる習慣や周囲の自然と関連付けていく点も, 注目に値する。

各女性たちの言説 (使用する修飾語・トウモロコシの意味づけ) は以下ようになる (表2)。

事例1～4の女性たちの言説では, 科学技術の導入というかたちで外部から侵入してくる遺伝子組み換え作物や化学薬品に対し, これまで日常の中で当たり前食べていた自分たちのトウモロコシにさまざまな意味づけをおこない, 再評価している。この際, 外部からもたらされる新たなモノや概念をうまく利用することで, 自分たちのトウモロコシを差別化したり, 意味を強化させたりしながら, “我われのトウモロコシ” として再発見している。

4.3 トウモロコシ料理にみられる工夫

本節では, プロジェクトに参加する女性たちがトウモロコシ料理に施している工夫について記述する。

近代化を押しつけるあるいはもたらす外部に対し, “我われのトウモロコシ” をいかに見せているの



図7. 入念にトウモロコシの髪をとり除く作業をおこなう (2013.07)

かを検討する。

〈事例1〉トルティージャークレオール・トウモロコシ製トルティージャを美味しく見せる試み—

トルティージャは、チアパス高地のみならず、メキシコの食卓に必ずと言っていいほどのぼるトウモロコシの代表料理である。

トルティージャの一般的な作り方は、①乾燥したトウモロコシの粒を水に浸して洗い、水面に浮かんだゴルゴホ (gorgojo)³⁸⁾ と呼ばれる虫を取り除く。②石灰と一緒に煮、一晚寝かせる。こうしてできたトウモロコシをニスタマル (nixtamal) と呼ぶ。④トウモロコシを鍋から出して洗って碾く。⑤トウモロコシをこねる。この状態をマサ (masa) という。⑥ボラ (bola) と呼ばれる直径4～5cmほどのボール状にマサを丸め、それを押し器プレンサ (prensa) でつぶし、丸くて薄い状態にする。⑦焼く。鉄板の上に置いてしばらくすると、内部の空気が膨らむため、そのタイミングでひっくり返す。何度か裏返ししながら温め、両面がこんがり焼けたら出来上がりである。

トルティージャの作り方に関して、インタビュー調査を行った女性たちは皆「母親から教えてもらったやり方をそのまま引き継いでいる」(サン・クリストバル市、テオピスカ、アマテナンゴでの聞き取り調査2012.06-07, 2013.06) と答える。こうして幼い頃に母親から習って以来、日々繰り返しているというトルティージャ作りのなかで変化がみられるのは、トウモロコシの髪の除去に関する手順である。

トルティージャを販売する女性たちは、先に述べたトルティージャ作りの手順①の前に、トウモロコシを高いところから落とし、トウモロコシの髪やほこりを取り除く作業を入念におこなっているという。この作業は、「母親に教えてもらった。でも、このトルティージャは販売用だから。以前家で家族だけで食べていた時はそこまで気にしなかったけど、(消費者のなかには) 髪の毛が混入したように見えて嫌がる人もいるからね。より入念になった。せっかくクレオール・トウモロコシでできているのだから…その健康的なトルティージャを食べてくれる人にも良い印象で見たいもの。」(テオピスカでの聞き取り調査2012.07) とその変化を語る女性もいた (図7)。

〈事例2〉トスターダークレオール・トウモロコシ製トスターダとして有機食品市に出店—

トスターダは、トルティージャを鉄板でさらに温め続け、水分が完全になくなったサクサクとしたせんべいのような状態のものをいう。



図8. チンクルウァッヘ。生地の中に見える緑色の部分が練り込んだ薬草（2012.07）

プロジェクトに参加する一部の女性たちは、有機食品市に「クレオール・トウモロコシ製トスターダ」としてトスターダを販売しに行く。有機食品市の売り場では、「クレオール・トウモロコシ製」と書いたポスターを貼っている。「あそこの露天市は、食べ物や健康に気を配っている人がたくさん来るから。我われのトスターダも美味しいと評判でよく売れるの。やはり地元でとれたクレオール・トウモロコシだからね。」（サン・クリストバル市での聞き手テオピスカ在住エスピノサー一家2012.06-07）と、有機食品市ではクレオール・トウモロコシ製であることが消費者の注目をひく重要な要素のひとつであることを教えてくれた。

有機食品市で価値あるものとして評価されていることから、ここでもクレオール・トウモロコシと有機農法との結びつきを見てとることができる。

〈事例3〉 チンクルウァッヘ 一薬草を加えた「健康食」として有機食品市に出店—

チンクルウァッヘは、トホナバル族に古くから伝わる郷土料理である。手のひらサイズの小さめでやや厚みのあるトルティージャを作り、その中に煮たフリホル豆を入れ、もう一枚のトルティージャでふたをし、中身が出ないようにまわりをくっつける。一枚のトルティージャにフリホル豆をのせたり挟んだりして食べるのではなく、まんじゅうのように中に入れるのが特徴である。

トホナバル族の村出身の1人の女性（サン・クリストバル市郊外在住カルメン）は、マサに薬草を練り込み、薬草入りのチンクルウァッヘを有機食品市で販売している。近年は、健康志向から市では薬草入りのチンクルウァッヘの売れ行きが良いという。「私が幼いころ、母が身体に良いからとたまに薬草を入れて作ってくれていたの。それをふと思い出して、薬草入りチンクルウァッヘを作って市に持っていったら大好評だったの。いまは以前より、薬草入りを作る個数、ひとつあたりに練り込む薬草の量が増えた。」（サン・クリストバル市での聞き手カルメン2012.06-07）と、その変化を語ってくれた（図8）。

4.4 外部と内部—新たな食文化ネットワーク—

ムヘーレス・イ・マイスの女性たちの活動を通して、自分たちのトウモロコシを中心としたさまざまなネットワークの拡がりが見られている。

第一は、ムヘーレス・イ・マイスの内部に見られるネットワークの拡がりである。これまでの多くの研究で示されているように、チアパス高地に暮らす人びとの帰属意識は“村”であり、村人としてのアイデンティティが強いとされていた〔落合2007: 132-133など〕。

しかし、ムヘーレス・イ・マイスは、サン・クリストバル市・テオピスカ・アマテナンゴの3つ共同

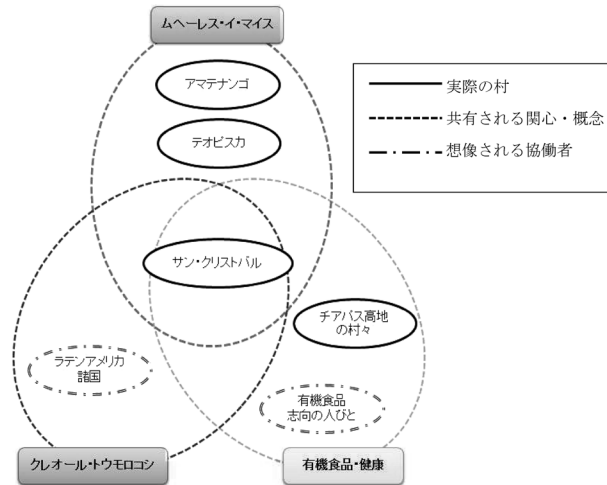


図9. 「我われのトウモロコシ」を中心としたネットワーク

体を跨いで活動が展開されており、地域のトウモロコシによるトウモロコシの生産-処理・調理-消費の一連のつながりを構築し、彼女たちのいう「トウモロコシ文化」を守っていくことが目標とされている。この生産-処理・調理-消費の循環は、「我われのトウモロコシ」を中心とした、“村”を超えた“地域”としての3つの共同体の連携としてとらえることができるだろう。

第二は、外に開かれたネットワークの拡がりである。プロジェクト参加者の女性の多くが出店している有機食品市では、「有機食品」「健康」という概念のもと、共通の問題意識や関心を持つほかの出店者や消費者との新たなネットワークが形成されている。有機食品市へは、チアパス高地に位置するさまざまな先住民村落からトウモロコシに限らず、有機野菜や有機ハチミツ、有機食材を使用して作ったパンを持ち込んだ人びとが集まってくる。さらに、サン・クリストバル市に暮らす外国人や観光客が消費者として訪れる。ここでは、人びとがより健康的な食生活を実現するためのアイデアを交換し合い、時には共同で勉強会を開催する約束を交わすこともある³⁹⁾。

「クレオール・トウモロコシ」というキーワードに着目すれば、メキシコ国内の他州、ラテンアメリカ諸国で活動をおこなっているクレオール・トウモロコシの保護団体との今後の協働の可能性も指摘できるだろう。プロジェクトリーダーのルーシーは、オフィスのインターネットでこうした他団体の活動の様子をチェックしたり、団体が発行したクレオール・トウモロコシに関する雑誌をほかの女性たちと共有したりしていた。

こうした外部とのネットワークの拡がりには、「有機食品」「健康」「クレオール・トウモロコシ」という関心や概念を共有する人びととの協働関係を表しているといえよう。インターネットへのアクセスによって、外部世界とのつながりは今後さらに強化されていく可能性もある。

以上の関係を図に示すと、上図のようにまとめることができる(図9)。

5. トウモロコシ文化の創造を考える—トウモロコシの「近代化」

ここまで、外部からの働きかけと、それに対するチアパス高地内部の反応、とりわけ「ムヘーレス・

イ・マイス」に参加する女性たちの言説・実践を事例に記述してきた。

本章では、トウモロコシをめぐる外部からの社会状況の変化と、それに伴うチアパス高地内部の応答というこれまでの議論をまとめる。そして、トウモロコシに自分たちや自文化を重ねている人びとの言説・実践を、トウモロコシの「近代化」という観点から分析し、「我われのトウモロコシ」「我われのトウモロコシ文化」を構築していく諸相を考察する。

5.1 外部からの働きかけ—技法 (technique) から技術 (technology) へ—

チアパス高地は、現在も先住民人口が多いことで知られており、メキシコ国内でも生活様式が“先住民的”であることで知られている。しかし、チアパス高地も、近代化の流れから完全に独立して存在しているわけではない。1950年代に完成したパン・アメリカン道路に代表される高速道路の開通により、人の往来は活発化し、サン・クリストバル市はいまや国内外で有名な観光都市となっている。

トウモロコシ農耕に関する変化としては、1960年代からチアパス高地で取組みが開始された緑の革命があげられる。この取組みにより、化学肥料や除草剤などの化学薬品および改良品種の種子といった新たな科学技術が導入され、古くからおこなわれていた現地の伝統的農法に変化をきたすこととなった。具体的な変化としては、①三姉妹農法および焼畑農法の衰退、②日常生活のなかで欠かすことのできなかった農具“鋤”の使用機会の減少、③新たに導入された化学薬品の使用量の増加が挙げられる。

チアパス高地に古くから伝わる農法は、まさに現地の自然との関わり合いのなかで編み出された農法であった。三姉妹農法は、トウモロコシ・フリホル豆・カボチャをミルパで同時に栽培することで、食事の栄養の面からも、ミルパの肥沃維持の観点からも、優れたシステムであった。また、焼畑農法も、植物の発生および地力の回復を自然の力に委ねる、シンプルでありながらも最適化された仕組みであった。

こうした現地の人びとによって長い年月をかけて培われた農法は、現地の言葉を借りれば、先人たちの「知恵 (sabios)」・「農民の体験知 (conosimientos campesinos)」を結集させた農業“技法 (técnica)”であり、緑の革命によってもたらされた近代農業は、“技術 (tecnología)”に依拠した農法であったといえる。

さらに、1994年1月1日に発効したNAFTAは、こうしたトウモロコシの「近代化」に拍車をかけることとなった。チアパス高地では、マクロな政治レベルで心配されていた経済的インパクトはそれほど大きくなかったが、その代わりに「遺伝子組み換え」という新たな“技術”の侵入 (の可能性) を意味することとなった。

以上のように、外部からもたらされた科学技術は、トウモロコシ農耕を“技法”から“技術”へと移行させることとなった。

5.2 チアパス高地の応答—揺れ動くトウモロコシの価値と内部からの反応—

チアパス高地内部では、外部からの働きかけですべてが浸食されるわけでも、完全に拒絶するわけでもない、トウモロコシの価値の揺れ動きともとれる状況が展開している。

トウモロコシ農耕を営む上で必要不可欠であった農耕儀礼は衰退し、トウモロコシに付与されていた宗教的価値が減少する一方、自分のミルパでとれたトウモロコシに対する格別な愛着や1本のトウモロコシを余すところなく使いきる習慣は、トウモロコシと人の一連の関わり合いのなかで、現在もその価

値が深く根づいているといえるだろう。こうしたトウモロコシの社会的・文化的位置づけが変化に直面し揺れ動いている状況のなかで、自分たちのトウモロコシを“価値あるもの”として再発見していくという内部からの新たな反応がある。

それは、これまで現地の人びとのアイデンティティの拠りどころであった“村”を超えた、新たな団体の創設である。トウモロコシやミルパの「生物多様性」の保護を目的とするものや、「有機農法」の確立を目指すもの、そして本稿で取りあげた「我われのトウモロコシ」の保護を目的とする団体など、その関心や目的はさまざまであるが、彼らに共通してみられる特徴は、それまで当たり前のように食べられてきた自分たちのトウモロコシを“価値あるもの”“守るべきもの”として位置づけ直し、再発見している点である。

5.3 「我われのトウモロコシ」

本稿で事例として取りあげたプロジェクト「ムヘーレス・イ・マイルス」に参加する女性たちの言説・実践から、地域のトウモロコシを外部からの働きかけに対抗し得るものとするために、それまで“無名”であった自分たちのトウモロコシにさまざまな意味づけをおこない、「我われのトウモロコシ」を再発見し、獲得していく様子が見てとれる。外部由来の概念をうまく取り入れ、自分たちのトウモロコシを価値あるものとして位置づけ直す道具として利用する。

さらに、「我われのトウモロコシ」は、こうした外部との関係性に加え、その地に暮らした先祖たちの有していた宇宙観や習慣という“伝統”が持ち出されることにより、さらにその価値が強化されていく。

本節では、女性たちの言説・実践から見えてきた「我われのトウモロコシ」の構築の諸相を明らかにする。

(a) 日常のトウモロコシの我われへの奪還

女性たちは、外部由来の概念を“受け入れがたいもの”として一旦は保留するものの、自分たちのトウモロコシを差異化したり、一部を“受け入れ可能なもの”として取り込み、自分たちのトウモロコシに新たな意味づけをする際の道具として用いたりする。

それは、自分たちのトウモロコシを“価値あるもの”として再発見し、「我われのトウモロコシ」として自分たちのもとに奪還していくプロセスであるといえよう。

女性たちは、トウモロコシを語る際に使用する“トウモロコシの名称”によって、外部から入ってきた概念を組み合わせ、これまで“無名”であったトウモロコシを再評価し、分類に分類を重ねて序列化し、「我われのトウモロコシ」を創り上げていく。

以下にトウモロコシの再評価、再定義の様子を図示し、その流れを詳述する。

第4章で記述した“トウモロコシの名称”（「トウモロコシ (maíz)」を表す際に用いられる修飾語）を女性たちの評価・序列に従って分類すると以下のA～Cのようになる（表3）。

Aに分類されるトウモロコシは、その地域でとれた“地域特製”のトウモロコシであり、長い年月の間、農民による交配と選別が繰り返されて現在に受け継がれたトウモロコシである。Bは、科学技術の過程を経たもので、緑の革命当時に配布された改良品種のトウモロコシなどがそれにあたる。Cは、遺伝子組み換えトウモロコシであり、女性たちの話によると、Bよりも悪い。遺伝子組み換えトウモロコシは、すべてを均質化してしまう点が脅威であるという。

この分類で良いトウモロコシとされる“地域特製”トウモロコシは、外部由来の「遺伝子組み換え」や「化学薬品」という“技術(tecnología)”を“受け入れがたいもの”として対に置き、差別化するこ

表3. トウモロコシの名称の序列

良い ↑ ↓ 悪い	A: Maiz local, criollo, nativo, propio	農民自身が種を選別し代々受け継いできたもの
	B: Maiz hibrid, mejorado, tecnificado (semilla mejorado, curado)	科学技術による選別を経たもの 品種改良されたもの
	C: Maiz transgénico	遺伝子組み換えトウモロコシ

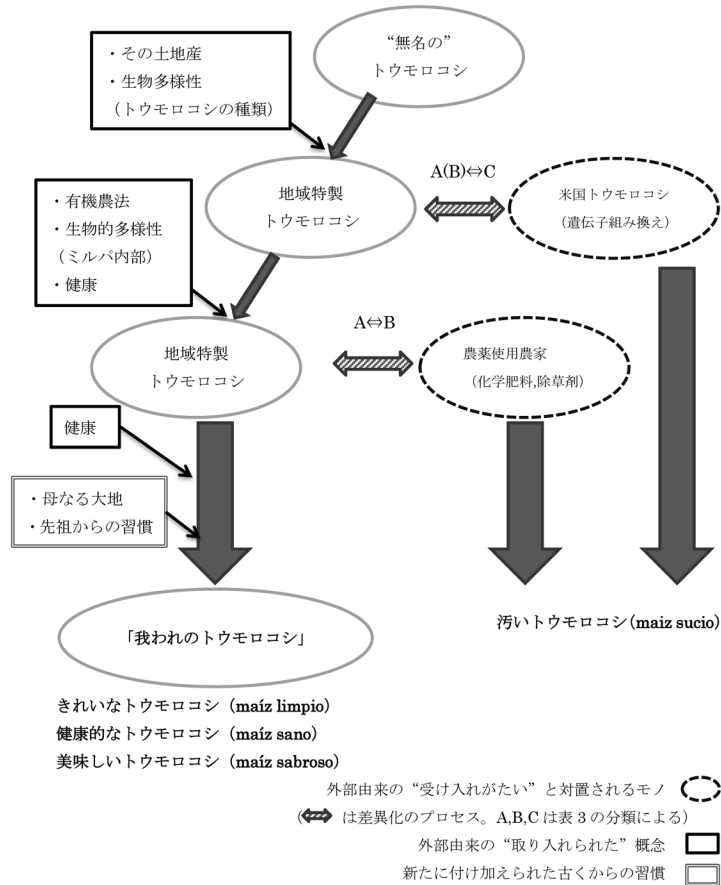


図10. 「我われのトウモロコシ」の奪還プロセス

とで獲得された。

しかし、先にも述べたように、女性たちは外部の概念やモノをすべて拒絶しているわけではない（図10）。

図10に示したように、「我われのトウモロコシ」を奪還していくプロセスには、「遺伝子組み換え」「化学薬品」という“受け入れがたいもの”と差別化するだけでなく、外部由来の概念を“取り入れて”利用し、意味を強化している面も観察された。

「遺伝子組み換えトウモロコシ」と対置する際には、「その土地産であること」（遺伝子組み換え＝米国産という認識があるため）や「生物的多様性」（トウモロコシの種類としての）、「化学薬品」の使用と区別する際には、ミルパ内部の「生物的多様性」（除草剤を使用しないためトウモロコシ以外の植物も生育可能）「有機農法」「健康」という外部から“取り入れられた”概念で、自分たちのトウモロコシが意味づけられ、価値が補強されていく。

ギデンズ（1993）は、「近代化」の主要な源泉のひとつとして、脱埋め込みメカニズムをあげた。脱埋め込みメカニズムとは、社会関係が時空間を超えて拡大していく中で、社会的活動をローカルな脈絡から「引き離し」、時空間の無限の拡がりの中に再構築することを意味している〔ギデンズ1993: 35, 72-73〕。つまり、脱埋め込みされた概念は、「地域性」と切り離され、転移し、その他の地域で適用可能となり、再埋め込みされるわけである〔ギデンズ1993: 174-176〕。

女性たちの言説のなかで持ち出される外部由来の「生物多様性」「有機農法」「健康」という概念は、人類共通の価値としてグローバルかつ普遍的な性質を有する、まさに近代社会のなかで脱埋め込みを遂げた概念であるといえるだろう。

つまり、女性たちの言説に見られるトウモロコシの再評価・再定義の試みを、外部由来の新たな概念を再埋め込みさせて利用する過程としてとらえることが可能である。

(b) 大地の意識化

さらにもう一つ重要なのが、「我われの母なる大地」の存在である。

女性たちの言説からは、化学薬品の使用のなかで忘れかけられていた、大地の生命の源としての役割が再認識され、大地が意識化されていく様子を観察することができた。

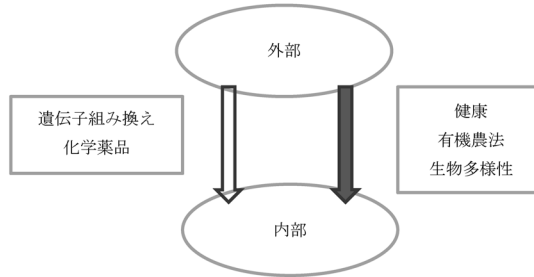
大地には魂（alma）が宿ると観念される。現地のソチル語では“チュレル”といい、生命体のように語られる。大地を大切に扱うこと・世話すること・良い食事を与えることで、恵みがもたらされることが強調される。大地を意識化することで、大地との関係性の中に自分たちを位置づけ直し、そこで収穫されるトウモロコシにさらなる意味づけがなされる。

ロバートソン（1997）は、グローバルなものとローカルなもの相互の働きかけとして、「グローカリゼーション」を提唱した。ロバートソンによると、グローバルな次元のものをローカルな次元のものに適応可能なものとして土着化させることがグローカリゼーションの本質である。前川（2004）は、こうしたローカルな社会の反応を翻訳的適応として説明したが、それによると、ローカルな社会がグローバルな概念を読みかえ適応することで、その地域の伝統的な観念が維持されるとともに、もとの概念自体にも変化をもたらすというものである。

チアパス高地の例でも、「有機農法」という概念を“母なる大地を大切にみつかう”“母なる大地に良い食事をあたえる”農法として、古来の価値観と接近させて理解している。彼女たちの説明によれば、「化学薬品」は大地を傷つけるため、大地は食料（トウモロコシ）をもたらさなくなるか、「病気の」「汚い」トウモロコシを結実させるかのいずれかである。「有機農法」つまりは“母なる大地を大切にみつかう”農法によれば、母なる大地に良い食事（有機肥料）を与えられ、健全な状態に保つことができる。そして、健全な母なる大地からは、「きれいで」「健康的で」「美味しい」トウモロコシが生るというわけである。

以上のような（a）トウモロコシを奪還するためのトウモロコシの序列化および（b）大地の意識化の過程を経て、“きれいで”“健康的で”“美味しい”三位一体の「我われのトウモロコシ」を創り上

○近代化を押しつけてくる「外部」



○「我われのトウモロコシ」を受け入れ得る「外部」

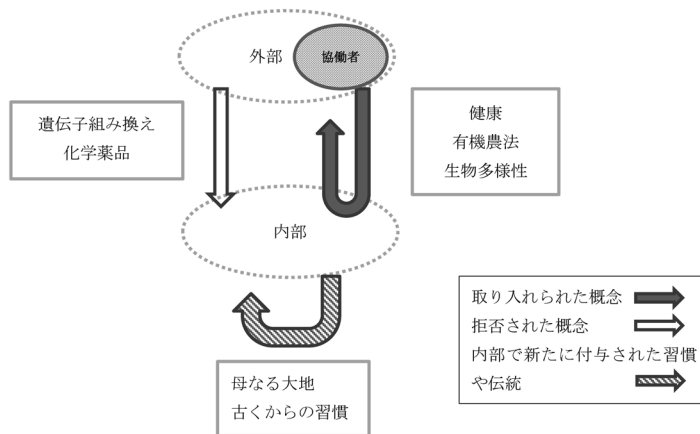


図11. 外部の変容

げている。

ところで、こうした外部由来の概念によってその価値が裏付けされた“三位一体の「我われのトウモロコシ」”は、「有機農法」「健康」「生物多様性」という人類普遍の価値を軸に、外部社会への開放性・外部社会との連帯の可能性を手に入れている。

それは、ムヘーレス・イ・マイスの活動の拡がりというかたちで観察されたが、これまでは科学技術の導入や市場経済の介入というかたちで近代化を押し付けてくるだけの存在であった「外部」から、「我われのトウモロコシ」を武器につながり得る・共通の問題意識や観念を持ち「我われのトウモロコシ」を受け入れてくれる「想像の協働者」の存在を期待できる「外部」へと変化したことを示唆しているだろう（図11）。

5.4 「我われのトウモロコシ」の先に

ここまで、外部からの働きかけと、それに伴う内部の応答をトウモロコシの「近代化」という観点で分析し、「我われのトウモロコシ」を創り上げ、奪還する諸相を明らかにしてきた。チアパス高地の人びとは、外部由来のモノや概念を、時には“受け入れがたいもの”として対置し、時には“受け入れ可能なもの”として取り入れることで、自分たちのトウモロコシを再評価し、「我われのトウモロコシ」

を奪還していった。

しかし、「我われのトウモロコシ」は一体何ものなのだろうか。

「我われのトウモロコシ」や「母なる大地」は、実体があるわけではなく、外部からの働きかけのなかで、女性たちによって再発見され“創られたもの”である。こうした「我われのトウモロコシ」の真正性の拠りどころが、先祖たちが有していた古くからの宇宙観や習慣という“伝統”の再発見に求められていったことも注目すべき点である。

ギデンズ（1997）は、近代の特性のひとつに「再帰性」を挙げ、「再帰的近代化」という局面は、グローバル化と伝統的行為の発掘という一対をなす過程によって特徴づけられている〔ギデンズ1997: 178-179〕とし、その理由を、近代における脱埋め込みメカニズムが、抽象概念を地域性と切り離してグローバル化させていくと同時に、伝統がこれまで依拠した場所との結びつきを完全に切り離してきたためであるとしている〔ギデンズ1996: 178-187〕。これは、近代は「場所を奪うもの」としながらも、ローカルな共同体の喪失という方向性には意義を唱えるギデンズの姿勢からも理解することができよう〔ギレンズ1993: 136-137, 174-175〕。

人類共通ともいえる外部由来の概念によって再評価され価値づけられた「我われのトウモロコシ」は、もはや“我われ”の暮らすチアパス高地という「地域性」を失った。こうした自分たちのもともとから抜け出し浮遊しかねない性質を持つ「我われのトウモロコシ」を、“我われのもの”として自分たちのもともとに留めておくには、外部との関わり合いの中からだけでなく、我われ自身の中にある材料を発掘し、それによって意味づけされる過程が必要となってくる。先祖たちの持っていた宇宙観や習慣・母なる大地との関係性という地域社会の“伝統”を持ち出すことで「我われのトウモロコシ」の価値をさらに強化していった女性たちの取組みは、「我われのトウモロコシ」の正当性の根拠となるものを先祖代々のルーツに求めた、まさに伝統発掘の試みとして理解することができるだろう。

しかし、伝統も完全無欠な状態でそこに存在しているのではなく、ホブズボウム（1985）のいう「創られた」ものであり、再帰的近代においては、みずからを説明し、正当づけることを求められている〔ギデンズ1996: 196-200〕。

つまり、彼女たちが「我われのトウモロコシ」「母なる大地」を奪還するだけでなく、今後も“我われのもの”として保持していくためには、その拠りどころとなる自身の伝統をも再帰させ、自らの中に正当性を創り出し、再発見し、再び奪還するという一連のプロセスの絶え間ない作業が必要となろう。

6. おわりに

本稿では、「有機栽培」「健康」「生物的多様性」という外部由来の普遍的価値によって意味を付与された「我われのトウモロコシ」が外部世界への開放性を獲得したこと、そして、女性たちの活動も「我われのトウモロコシ」を軸に、外部世界の「想像の協働者」との連帯の可能性を手に入れていることについて指摘した。それはつまり、彼女たちにとっての「外部」が、これまで近代化を一方的に押し付けてくるだけであった存在から、三位一体の「我われのトウモロコシ」を武器につながり得るものとして変化していることを示しているともいえるだろう。

しかし、本稿では具体的な外部の団体・個人との協働についてまでは触れられず、ネットワークのさらなる拡大の可能性を指摘するにとどまった。彼女たちの活動は、これからさらにその展開範囲を拡げていくのか。「我われのトウモロコシ」の行きつく先はどこなのか。

今後の外部とのつながりや、外部からの「我われのトウモロコシ」の評価を追うことができれば、さらに多角的な視点からより深い議論が可能になるかもしれない。彼女たちの「我われのトウモロコシ」の奪還・維持の活動は2008年に始まったばかりである。今後の動向を注視していく必要があることを指摘するとともに、こうした分野を今後の課題としたい。

注

- 1) トルティージャ (tortilla) は、日本語に訳す際に「トルティーヤ」や「トルティーリャ」などの訳語があるが、本稿ではスペイン語の音に最も近い「トルティージャ」と表記する。
- 2) トウモロコシはその耕作可能地域の広さゆえに、原産地に関して「旧大陸説」・「新大陸説」に意見が二分され、長年議論されてきたが、「新大陸説」が支持されて以降は、主に中央アメリカや南アメリカを中心に、その地で起こった文明の遺物に残る図像の研究・堆積物の解析が進められてきた。近年の発掘調査によって、トウモロコシの原産地をメキシコ・プエブラ州に位置するテワカン渓谷であるとする有力説が提唱された。この渓谷で発掘がおこなわれた洞窟内からトウモロコシの穂軸の遺物が大量に出土したためである [戸澤2005: 2-3; 酒田2011: 208-209]。
- 3) 1821年に独立を達成したメキシコでは、隣国アメリカや宗主国スペインなどの欧米諸国に対抗しうる強力な近代国家の形成に取り組む必要があった。とりわけポルフィーリオ・ディアス (Porfirio Díaz 1830-1915) 政権下 (任期: 1876-1880, 1884-1910) では、西欧をモデルとした国家の近代化が急速に進められた。詳しくは青木 (1998) を参照されたい。
- 4) 国家の近代化に伴い、生産性の向上を目的とした農地改革および緑の革命による新科学技術の導入がみられる。農地改革の変遷については石井 (1983) を参照されたい。農業部門は、①工業化に必要な外貨獲得のための輸出品を生産する、②都市の労働者に安価な食糧を供給する、という2つの役割を担われ、生産の増大が重視された。
- 5) 1990年から交渉が開始され、1994年1月1日に発効した、アメリカ・カナダ・メキシコの3国による自由貿易協定である。貿易の完全自由化が14年という期間を設けて実現させることが規定された [谷2010: 45]。メキシコではスペイン語の略語でトルカン (TLCAN: Tratado de Libre Comercio de América del Norte) とよばれるが、本稿では日本でも馴染みのある「NAFTA」と表記する。
- 6) メキシコでは、トウモロコシ畑のことをほかの畑と区別して「ミルパ (milpa)」と呼ぶ。本稿でトウモロコシ畑を示す際は、ほかの畑と区別するために、現地言葉にそって「ミルパ (milpa)」という語を用いて記述する。
- 7) メキシコ最南端の州 (隣国グアテマラと国境を接する) チアパス州の中央に位置する高原地帯を指す。スペイン語名は「los Altos de Chiapas」。高い地を指す「Altos」の訳語として「高地」や「高原」があるが、本稿では「高地」で統一して表記する。
- 8) 乾燥した気候で実りをもたらす品種もあれば、湿地や干拓地などの湿潤な条件を好む品種もある。例えば、スペイン入植前にメキシコの地で栄えたアステカ帝国は、首都テノチティランをテスココ湖の南の沼地に建設したが、この地に暮らす人びとは、土が流れないように木を植えて作った「チナンパス」とよばれる水上菜園でトウモロコシを栽培していたことで知られている。トウモロコシの最適育成条件は、最低10度以上の比較的低温であり、さらに、標高約3000メートルの高地でも生育可能であったことから [菊池1987: 64]、国土の大部分が高地に位置し、標高2000メートル以上の山間部に集落が点在するメキシコにおいても、主要な食料源として重宝されるに至ったと考えられる。
- 9) トウモロコシの原産地はメキシコのテワカン渓谷であるとされており、同地の紀元前6800～5000年の地層から穂軸の長さが約2～3cm、直径が約5mmの小さな種子が20粒くらいついた原始的なトウモロコシが出土している [戸澤2005: 2-3; 酒田2011: 208-209]。紀元前3500年頃の地層からは、穂軸の大きい (5～7cmほどの) 栽培種のトウモロコシが発見されており、この頃に本格的な農耕生活が始まったと考えられている。現在のような大きさのトウモロコシが出土するのは、紀元前1500年以降の地層からである [戸澤2005: 2-3; 酒田2011: 208-209]。
- 10) キルヒホフ (Kirchhoff) の文化要素の分布研究によって命名された領域。

- 11) 植民地時代初期に『メシーカの歴史 (Histoire du Mechique)』という名で出版された文書には、トウモロコシの起源にまつわるナワの神話が収められている。2人の神、ピルツインテクウィトリ (Piltzintecuhtli) とソチピリ (Xochipilli) はシンテオトル (Cintéotl) を子にもうけたが、その後、シンテオトルは、人類に役立つ多種多様な植物を産み出すために地中に埋められた。彼の身体の各部位から野菜や果物が生り、トウモロコシは爪から現われたという [López 2003: 31]。López (2003) によると、この神話からトウモロコシがほかの果実と比べて傑出した存在であったことを読み取ることが可能だという。その根拠は、神自身の名前にあり、「シンテオトル」は当時の言葉で「トウモロコシの穂の神 (el dios mazorca)」を意味することが明らかになっている [López 2003: 31]。
- 12) 生と死のサイクルと植物としてのトウモロコシの性質を重ね合わせた神話は、種々の村で語られ、いくつものバリエーションが存在するが、内容の鍵となるのは“トウモロコシの持つ二面性”である。地下世界を死の世界、地上世界を生の世界とするメソアメリカの宇宙観に、トウモロコシの植物としての性質 (地中に埋められ、再び地上世界へと出現する発芽力を持っている) がそれぞれ重ね合わされている [López 2003: 33-34]。
- 13) 紀元前1200年頃から現在のメキシコの南東部で栄えた文明。メソアメリカの文明の母として知られている。
- 14) 吾郷 (1985) は、アメリカのロックフェラー財団が3人のアメリカ人専門家をメキシコに派遣した1941年を「緑の革命」の開始年といえるとしているが、開始年が研究によってさまざまであることも同時に指摘している [吾郷1985: 3]。1943年は、メキシコ政府とロックフェラー財団の共同研究が始まった年であり、本稿ではRuiz Díaz 他 (2006) らにならって1943年をメキシコにおける「緑の革命」の開始年とした。
- 15) Ruiz Díaz 他 (2006) は、緑の革命の一連の取組みを「技術 (tecnología)」の適用として表現し、農民たちの持つ「技能 (técnica)」と厳密に区別している。彼らによると、「技能 (técnica)」は、資源を活用するための熟達した実践であり、「技術 (tecnología)」は、科学という学問のなかで得られた新しい知識の適応である [Ruiz Díaz 他2006: 9-10]。
- 16) フィッティング (2012) は、トウモロコシの文化的・象徴的重要性について、「トウモロコシは、メキシコという国では、特殊に強力な、時には対立もする多層的な意味合いをもつ国民的な象徴となっている」 [フィッティング2012: 26] と指摘している。
- 17) メキシコは、約197万km²という広大な国土を有しており、31州と1連邦区 (Distrito Federal) から成っている。
- 18) メキシコ国立統計地理情報院 (INAGI) の2010年の調査による。メキシコの総人口は、112,336,538人である。
- 19) スペインによる長い植民地時代を経験し、混血の進んだメキシコでは、先住民と非先住民を分けることが困難となっている。過去には、身体的特徴や文化的特徴、使用言語などによる区分が試みられたが、どれも基準があいまいなままであった。(詳しくは大村 (2007) 等を参照されたい。) 身体的特徴が先住民でも、都市での生活が基盤となっている人がいたり、スペイン語教育の普及によって、スペイン語話者もしくは民族の固有言語とのバイリンガルである若者の人数が増加したりと、1つの基準を設けることは困難であり、現在は自己申告制となっている。
- 20) メキシコ内務省 連邦・市町村開発院 (INAFED Instituto para el Federalismo y el Desarrollo Municipal, SEGOB Secretaría de Gobernación) 報告より。この統計のインディオの基準が何であるかは明記されていない。しかし、こうした調査を裏づけるかのように、「チアパス高地の半数以上はインディオである。」 (サン・クリストバル市での聞き取り2012.06-07, 2013.07) という語りは調査中もよく耳にした。
- 21) パン・アメリカン道路は、南北アメリカを一本につなぐことを目的に整備された幹線道路である。1923年にチリのサンティアゴで開催された第5回米州国際会議で構想が提唱された。アメリカ・アラスカ州を起点とし、北米大陸の西岸から中西部を通り、中米を抜け、南米大陸の西岸を通りチリのサンティアゴからアンデス山脈を横断し、アルゼンチンに位置する大陸最南端のティエラ・デル・フエゴ (Tierra del Fuego) に至る。主に1940年代から1950年代にかけて整備が進んだ。
- 22) 都市での生活に慣れ親しんだ者を指す言葉として、「ラディーノ (ladino)」という語がある。これは、身体的特徴によるものではなく、“都会的な”生活をしている者を指す。チアパス高地での調査中、この「ラディーノ」という言葉をしばしば耳にした。「サン・クリストバル市はラディーノの街だから。」 (テオビスカ、アマテナンゴでの聞き取り2012.07, 2013.07) 「あいつは街に出て、大工をしているらしい。だからミルバでの仕事もわからない。ラディーノになってしまった。」 (テオビスカでのレイナの夫からの聞き取り2013.07) というような使われ方をしていた。飯島 (1993) は、ラディーノとインディオの区別に関して、「決して人種の区分ではない。昨日まで

インディオであったものも、村を出て都市に住みつき、固有の衣装を脱ぎ、スペイン語だけで生活し始めたなら、インディオ社会からはラディーノと見なされる。つまり両者の境界は個々人の選択によって揺れ動く主観的なものと言えよう」としている〔飯島1993: 222-223〕。

- 23) 観光促進を目的に、2001年にメキシコ政府観光局（SECTUR）主導のもとで設立されたプログラムである。魔法がかけられたかのように魅惑的な国内の自治体を選出するというもので、メキシコ政府観光局ホームページによると、選出基準は、「象徴性・伝説・歴史・超越的出来事・日々の生活など、それぞれの社会成員の表象として文化的に魅力がある場であること」である。
- 24) メキシコ国立統計地理情報院（INAGI）の2010年の調査による。
- 25) チアパス高地に住む人びとは、古くから土地に対して独自の観念を持つことが指摘されている。そのひとつに、土地を熱い土地（Tierra caliente）と冷たい土地（Tierra fria）に分ける習慣があげられる。チアパス高地に住住するソチル族についての民族誌Holland（1963）、Guiteras（1965）、Gossen（1989）を参照されたい。
- 26) アマテナンゴ・デル・バジェの人びとは、テオピスカについて話す際、「あの人たちだってラディーノ。もうサン・クリストバル市のようなもの。私たちとは違う。」（アマテナンゴ・デル・バジェでの聞き取り2013.07）と語り、その理由として、サン・クリストバル市へのアクセスの容易さや、便利に変化しつつある生活環境をあげていた。
- 27) メキシコ国立統計地理情報院（INAGI）の2010年の調査による。
- 28) メキシコでは、トウモロコシの実が生った後もミルパに放置し、十分に乾燥してから“乾燥トウモロコシ”を収穫する。調査をおこなったチアパス高地では、食事の度に必要な分の乾燥トウモロコシを碾き、調理するのが一般的である。日本で食べられるトウモロコシのように、実が柔らかい若トウモロコシのことを「エローテ」と呼び、食べることもあるが、それは結実したトウモロコシのごく一部を収穫するに限る。
- 29) 酒井（2010）は、メソアメリカの人びとが、このユニークな混植栽培法を紀元前1000年頃にはすでに確立していたと述べている〔酒井2010: 211〕。
- 30) マメ科の植物は、大気中の窒素を取り込んで有機窒素に変える能力のある根粒菌を根に保有しているため、畑に自動的に窒素肥料が供給されることとなる〔酒井2010: 212〕。
- 31) 吾郷（1985）は、1967～1973年に緑の革命の新技术を普及させる目的で行われた「プエブラ計画」において、当初はトウモロコシの新品種の導入を試みたものの、新品種よりも在来品種の方が収量等の面で優れていることが判明し、計画途中から在来品種と近代的投入財（化学肥料・除草剤）の組み合わせに変更したという事例を紹介している。
- 32) チアパス高地では、自らのミルパで収穫したトウモロコシの中から選りすぐりの種子を保管し、翌年再び播くという、代々受け継がれてきたトウモロコシで農耕を営んでいく習慣が深く根づいている。インタビュー調査でも、自分のミルパで収穫された種子を使用するという回答ばかり得られたが、この結果は、現地の人びとの自らのミルパでとれたトウモロコシの種子への愛着・価値観が大きく影響していると考えられる。
- 33) 「ほら、この畑を見て、こんなに弱って。それに、農薬をまいているから、トウモロコシしか育っていないでしょ。除草剤というのは、トウモロコシだけを残して、他の植物を死滅させるようにできているの。だからこのミルパにはトウモロコシしか生えていない。私たちのミルパをご覧、すべてが実っているでしょう。」（テオピスカでのレイナからの聞き取り2013.07）と、除草剤耐性のあるトウモロコシしか育っていないミルパと比較したり、「このトウモロコシは病気だ。きっと肥料や農薬の使いすぎで弱ってしまっているのでしょう。背丈も小さく茎も細くて…」（テオピスカでのレイナからの聞き取り2013.07）と、肥料に依存することによるトウモロコシの弱体化を指摘したりする語りを聞くことができた。
- 34) 赤トウモロコシに関しては、ゲレロ州で儀礼の調査を行っているGood（2002）が、赤トウモロコシを死者と共に埋葬する習慣について報告している。現地の人びとによると、死後の世界で旅を続けるために、大きな力を持っているとされる赤トウモロコシは、重要な食料源となる〔Good 2002: 263〕。メキシコ全土においてこうしたトウモロコシの色による信仰が存在することは注目に値する。
- 35) メキシコのオアハカ州で遺伝子組み換えトウモロコシの種子が見つかったとされる事件で、2001年に起きた。新聞等で大々的に取りあげられ、国内で知り渡ることとなった。
- 36) 通常、トルティージャは白または黄トウモロコシで作られるが、黒または青トウモロコシを原料とした色つきのトルティージャを食すことがある。黒または青トウモロコシは害虫に弱いため、自家消費用に栽培するには、

抵抗力があり多くの収穫が見込める白や黄トウモロコシが適しているという。

- 37) 大地を枯渇させている農法・実際に摂取している食事内容・人の健康などを多義的に指していると思われる。レイナは、大地に良い食事(=有機肥料)を与えると、健康的なトウモロコシの実りをもたらしてくれ、我われ自身の健康につながる。一方、大地に悪い食事(=化学薬品)を与えると、大地を傷つけ、我われの不健康へとつながると考えている。さらに、化学薬品の使用は、我われの健康を害するだけでなく、周囲の自然や環境との係り合いに終止符を打つものだけだということも語ってくれた。例えば、以下の言説を参照されたい。「そう、私たちは大地から食料をもらうのだからね、我われの母なる大地にも良い食事を与えないと。私たちの食事は、大地からもたらされるでしょう、想像してごらんなさい、もし化学薬品を与えてしまったら…それが私たちのところにかえってくる。もう自然との関わりは終わってしまっ…あとそう、環境ともね。」(テオピスカでのレイナからの問書2012.07)
- 38) ゴルゴホがいることも、化学薬品を使用していない証拠だと女性たちは語る。
- 39) 筆者は、この市に参加する有機トマト売りのアルゼンチン人女性と、ムヘーレス・イ・マイルスが共同で主催した「有機トマトジャム作り」勉強会に参加した。勉強会では、講師であるアルゼンチン人女性の指導の下、有機農法で育てられたというトマトを皮むきし、砂糖を加えてジャムを作った。試食時には、ムヘーレス・イ・マイルスの女性が作ったクレオール・トウモロコシ製のトルティージャがふるまわれた。

参考文献

・日本語文献

- 青木利夫, 1998, 「メキシコにおけるナショナリズムと〈インディオ〉—20世紀前半の〈インディオ〉統合教育をめぐる」中内敏夫編『人間形成の全体史—比較発達社会史への道』大月書店, 261-280.
- 青山和夫, 2012, 『マヤ文明—密林に栄えた石器文化』岩波書店.
- アバデュライ, アルジュン, 2004, 『さまよえる近代: グローバル化の文化研究』門田健一訳, 平凡社.
- 飯島みどり, 1993, 「『国家』に変容を迫るインディオたち」油井大三郎・藤政子編『南北アメリカの500年 5統合と自立』青木書店, 216-238.
- 石井章, 1983, 「メキシコの農地改革と農業構造—エヒードとネオ・ラティフンディオを中心に—」『ラテンアメリカの土地制度と農業構造』アジア経済研究所.
- 上杉富之編, 2011, 『グローバル研究叢書4 グローカリゼーションと越境』成城大学民俗学研究所グローバル研究センター.
- エリック, ジョン, ソリプソン, シドニー, 2008, 『マヤ文明の興亡』青山和夫訳, 新評論.
- エリック, ホブズボウム, テレンス, レンジャー編, 1992, 『創られた伝統』前川啓治訳, 紀伊国屋書店.
- 大貫美恵子, 1995, 『コメの人類学』岩波書店.
- 大村香苗, 2007, 『革命期メキシコ・文化概念の生成 ガミオ-ボアズ往復書簡の研究』新評社.
- 小澤正人編, 2011, 『グローバル研究叢書3 グローカリゼーションと文化移転』成城大学民俗学研究所グローバル研究センター.
- 小田亮編, 2010, 『グローバル研究叢書1 グローカリゼーションと共同性』成城大学民俗学研究所グローバル研究センター.
- 落合一泰, 1984, 『岩波グラフィックス27 マヤ—古代から現代へ』岩波書店.
- , 2007, 「ツォツィル」黒田悦子編『講座世界の先住民民族—ファースト・ピープルの現在— 08中米・カリブ海, 南米』明石書店, 130-145.
- カーン, スティーヴン, 1993, 『時間と空間の文化: 1880-1918年』浅野敏夫訳, りぶらりあ選書/法政大学出版局.
- 河合利光編, 2000, 『比較食文化論—文化人類学の視点から—』建帛社.
- 編, 2006, 『食からの異文化理解—テーマ研究と実践』時潮社.
- ギデンズ, アンソニー, 1993, 『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結—』松尾精文・小幡正敏訳, 而立書房.
- , 1997, 「ポスト伝統社会に生きること」『再帰的近代化—近現代における政治, 伝統, 美的原理—』松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳, 而立書房, 106-204.
- 国本伊代, 2002, 『メキシコの歴史』新評論.

- 黒田悦子, 1996, 『先住民ミへの静かな変容—メキシコで考える』朝日新聞社.
- 編, 2007, 『講座世界の先住民—ファースト・ピープルの現在— 08中米・カリブ海, 南米』明石書店.
- 吾郷健二, 1985, 「近代化とメキシコ農業—メキシコにおける「緑の革命」の生成とその意味—」『西南学院経済学論集』西南学院大学学術研究所, 20: 1-39.
- 湖中真哉, 2010, 「〈特集〉グローバリゼーション」を超えて—序「グローバリゼーション」を人類学的に乗り越えるために—」『文化人類学』75(1): 48-59.
- 小林貴徳, 2007, 「土地とともに生きる農民は協働できるのか—メキシコ・ゲレロ州先住民農村の闘い」石黒馨・上谷博編『グローバルとローカルの共振—ラテンアメリカのマルチチュード』人文書院, 80-101.
- 小林致広, 1999, 「チアパス, 豊かな土地と貧しい人々」『現代思想』27(12): 110-119.
- 酒井伸雄, 2011, 『文明を変えた植物たち—コロンブスが遺した種子』NHK出版.
- サンティッチ, バーバラ, プライアント, ジェフ編, 2010, 『世界の食鳥植物文化図鑑—起源・歴史・分布・栽培・料理』山本紀夫監訳, 柘風社.
- 清水透, 1988, 『エル・チチョンの怒り—メキシコにおける近代とアイデンティティ』東京大学出版会.
- , 1999, 「ラテンアメリカとは何か—統合圧力と拡散エネルギー—」清水透編『〈南〉から見た世界5—ラテンアメリカ統合圧力と拡散のエネルギー—』大月書店, 13-30.
- 柴田修子, 2007, 「マルチチュードの可能性—サバティスタ運動のローカル性とグローバル性—」石黒馨・上谷博編『グローバルとローカルの共振—ラテンアメリカのマルチチュード』人文書院, 36-62.
- 禪野美帆, 2006, 『メキシコ, 先住民共同体と都市—都市移住者と取り込んだ「伝統的」組織の変容—』慶應義塾大学出版会.
- 谷洋之, 2010, 「メキシコにおけるトウモロコシ生産・流通・消費の動向—自由化から新たな輸入代替へ?—」清水達也編『食糧危機と途上国におけるトウモロコシの需要と供給』アジア経済研究所, 39-60.
- 土佐弘之, 2013, 「食の脱領域化/再領域かをめぐって—グローバル・アグリフード・ガバナンスとの関連で—」『季報唯物論研究』(125): 10-21.
- 戸澤英男, 2005, 『トウモロコシ—歴史・文化, 特性・栽培, 加工・利用—』農山漁村文化協会.
- トムリンソン, ジョン, 2000, 『グローバリゼーション—文化帝国主義を超えて—』片岡信記, 青土社.
- 野村亨・山本純一編, 2006, 『グローバル・ナショナル・ローカルの現在』慶應義塾大学東アジア研究所叢書.
- フィッティング, エリザベス, 2012, 『壊国の契約—NAFTA下メキシコの苦悩と抵抗—』里見実訳, 農山漁村文化協会.
- 藤巻宏・鶴飼保雄, 1985, 『遺伝と育種3—世界を変えた作物—』培風館.
- 前川啓治, 2000, 『開発の人類学: 文化接合から翻訳的適応へ』新曜社.
- , 2004, 『グローカリゼーションの人類学: 国際文化・開発・移民』新曜社.
- 増田義郎, 2000, 「史料解説」ミラー, メアリ, タウベ, カール編『マヤ・アステカ神話宗教事典』武井摩利訳, 東洋書林, 317-325.
- 松下列, 2008, 「メキシコ農村から見たNAFTAの軌跡と現実(上) 農村の貧困化とトルティーリヤ危機」『アジア・アフリカ研究』48(1): 2-30.
- , 2008, 「メキシコ農村から見たNAFTAの軌跡と現実(下) 農村の貧困化とトルティーリヤ危機」『アジア・アフリカ研究』48(2): 2-34.
- 松村圭一郎, 2011, 『文化人類学』人文書院.
- ミラー, メアリ, タウベ, カール編, 2000, 『マヤ・アステカ神話宗教事典』増田義郎監訳, 武井摩利訳, 東洋書林.
- 八杉佳穂, 2004, 『チョコレート文化誌』世界思想社.
- 編, 2004, 『マヤ学を学ぶ人のために』世界思想社.
- 山本昭代, 2004, 「家を建てる女たち—メキシコ・ワステカ農村における社会変化とジェンダー—」『文化人類学』69(1): 70-85.
- リッツァ, ジョージ, 1999, 『マクドナルド化する社会』正岡寛司監訳, 早稲田大学出版部.
- レシーノス, アドリアン原訳, 2001, 『マヤ神話—ポボル・プフ—』林屋永吉訳, 中央公論新社.
- ローズ, ビル, 2012, 『図説世界史を変えた50の植物』柴田謙治訳, 原書房.
- ロバートソン, ローランド, 1997, 『グローバリゼーション—地球文化の社会理論—』阿部美哉訳, 東京大学出版会.
- ワトソン, ジェームズ編, 2003, 『マクドナルドはグローバルか: 東アジアのファーストフード』前川啓治・竹内恵

行・岡部曜子訳、新曜社。

・スペイン語文献

- Birkin, David (1988) "Cambios tecnológicos, dependencia y transformaciones de la sociedad rural" en *Las Sociedades Rurales Hoy*, El Colegio de Michioacán, pp. 83-100.
- Broda, Johanna (1997) "El Culto Mexica de Los Cerros de la Cuenca de México: Apuntes para la Discusión sobre Graniceros" en *Graniceros: Cosmovisión y meteorología indígenas de Mesoamérica*, El Colegio Mexiquense A.C.: IIIH, UNAM, pp. 49-90.
- (2002) "La etnografía de la fiesta de la Santa Cruz: una prespectiva histórica" en *cosmovisión, ritual e identidad de los pueblos indígenas de México*, pp. 165-237.
- Escalante Gonzalbo, Pablo (2004), *Nueva Historia Mínima de México*, Centro de Estudios Históricos del Colegio de México.
- Esteva, Gustavo (1980) *LA BATALLA EN EL MÉXICO RURAL*, con la colaboración de Birkin, David/ Betancort Alejandro/ Colman, Oscar/ Miriam Ribeiro, Rosa/ Rodrigo Javier, siglo veintiuno editores.
- (2003) "Los árboles de las culturas mexicanas" en *Sin maíz, no hay país*, pp. 17-28.
- Guiteras Holmes, Calixta (1965) *Los peligros del alma: Visión del Mundo de un Tzotzil*, Fondo de Cultura Económica.
- Gossen, Gary H. (1989) *Los chamulas en el mundo del Sol*, Instituto Nacional Indigenista.
- Good Eshelman, Catharine (2002) "El ritual y la reproducción de la cultura: ceremonias agrícolas, los muertos y la expresión estética entre los nahuas de Guerrero" en *cosmovisión, ritual e identidad de los pueblos indígenas de México*, pp. 239-297.
- Holland, William R. (1963) *Medicina maya en los Altos de Chiapas*, Instituto Nacional Indigenista.
- Lara, Sara M. (1988) "El papel de la mujer en el campo: nuevas estrategias" en *Las Sociedades Rurales Hoy*, El Colegio de Michioacán, pp. 297-306.
- López Austin, Alfredo (2002) "El núcleo duro, la cosmovisión y la tradición mesoamericana" en *cosmovisión, ritual e identidad de los pueblos indígenas de México*, pp. 47-65.
- (2003) "Cuatro mitos mesoamericanos del maíz" en *Sin maíz, no hay país*, pp. 29-35.
- López Austin, Alfredo/ Luis, Millones (2008) *Dioses del Norte, dioses del Sur*, Ediciones Era.
- Mariaca Méndez, Ramón/ Pérez Pérez, José/ López Meza, Antonio/ León Martínez, Noé Samuel (2007), *La milpa de los Altos de Chiapas y sus recursos genéticos*, El Coledio de la Frontera Sur, Universidad Intercultural de Chiapas.
- Nash, June (1975) *BAJO LA MILADA DE LOS ANTEPASADOS*, Instituto Nacional Indigenista.
- Navarrete Cáceres, Carlos (2002), *RELATOS MAYAS DE TIERRA ALTAS SOBE EL ODIGEN DEL MAÍZ: LOS CAMINOS DE PAXIL*, Universidad Nacional Autónoma de México Instituto de Investigaciones Antropológicas México.
- Petrich, Perla (1998) *NUESTRO MAÍZ DEL LAGO ATITLÁN*, Casa de Estudios de los Pueblos del Lago Atitlán
- Ruiz Díaz, Manuel de Jesús/ Parra Vázquez, Manuel Roberto/ Ávalos Cacho, Gerardo/ Mariaca Méndez, Ramón (2006) "Conocimiento campesino local y cambio tecnológico en la milpa de Santa Marta, Chenalhó, Chiapas" en *Revista de Geografía Agrícola, eneno-junio*, número 036, pp. 7-27, Universidad Autónoma Chapingo.
- Sánchez Gómez, Martha Judith (1996) "Utilización de los recursos naturales y estrategias de reproducción. Estudio de caso en dos comunidades de los valles de Oaxaca en *EL ROPAJE DE LA TIERRA Naturaleza y cultura en cinco zonas rurales*, Editorial Plaza y Valdés y el Instituto de Investigaciones Sociales de la UNAM, pp. 97-176
- Turok, Marta (1988) "Identidad cultural y sobrevivencia campesina" en *Las Sociedades Rurales Hoy*, El Colegio de Michioacán, pp. 307-316.

・ 英語文献

Barkin, David (2002), "The Reconstruction of a Modern Mexican Peasantry" en *Journal of Peasant Studies* 30, pp. 73-90.

Tani, Hiroyuki (2010) "From National Symbol to Economic Goods: A Brief History of Maize Consumption in Post-revolutionary Mexico" in *Food and Social Identities in the Asia Pacific Region*, ed. James Farrer, Tokyo: Sophia University Institute of Comparative Culture.

・ ホームページ (最終アクセス日)

Mirada Sur ホームページ 2012年7月30日記事

<http://miradasur.com/index.php/noticias/1-latest-news/48-padre-eugenio-llega-a-50-anos-de-vida-sacerdotal> (2014.01.27)

Mujeres y Maíz ホームページ

<http://mujeresymaiz.blogspot.jp/> (2014.01.27)

メキシコ国立統計地理情報院 (INAGI: Instituto Nacional de Estadística y Geografía)

<http://www.inegi.org.mx/default.aspx> (2014.01.27)

メキシコ政府観光局 (SECTUR: Secretaría del Turismo) 「プエブロ・マヒコ」計画

http://www.sectur.gob.mx/wb2/sectur/sect_Pueblos_Magicos (2014.01.27)

メキシコ内務省 連邦・市町村開発院 (INAFED: Instituto para el Federalismo y el Desarrollo Municipal, SEGOB Secretaría de Gobernación)

<http://www.inafed.gob.mx/work/enciclopedia/EMM07chiapas/index.html> (2014.01.27)